
進め！北区中央図書館レジスタンス

おかむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

進め！北区中央図書館レジスタンス

【Nコード】

N1292Y

【作者名】

おかむ

【あらすじ】

四大元素細菌と呼ばれる未知の細菌のパンデミックによって、他国からの干渉を受けた日本。時は流れて、事実上連合国の手に落ちた日本では仮初の平和を甘んじて享受していた。

至って普通の高校二年生、宮本大輔みやもとだいすけは何も変わらない日常を憂い、只々過ぎる日々をそれとなく過ごしていた。ある日、考えてもいなかった事件に巻き込まれ、自らの力に目覚め戦火に身を埋めることとなる。近未来SF物語？

日常（前書き）

作者のおかむと申します。

以下の点に注意して読んで頂ければ幸いです。

・初投稿作品で、誤字・脱字・言葉遣い等におかしな点があるやもしれません。

指摘していただければ嬉しいです。

・SFを謳っていますが、そこまで科学的な知識に富んでいる訳ではないので、かなり拡大解釈等がありますのでご了承ください。

・この物語はフィクションなので、作中に登場する単語・場所・名称等は全て架空のもので、実在する名称と同様の表記でも一切の関連性はございませんので注意してください。

それでは作品のほうお楽しみいただければ幸いです。

日常

四大元素細菌。

後にそう呼ばれることになる人類史上最悪の病原菌は突如として人々に襲い掛かった。

確認できる最初の感染者は、細菌研究を行っていた著名な日本人医学博士だったとされる。

彼はとある研究の最中、全くの偶然から四大元素細菌の開発に成功する。

そして、奇しくも自ら最初の感染者になってしまう。

細菌の開発から数日後、彼は突如として肉体を水泡と化し帰らぬ人となる。

彼の死から数日のうちに細菌は、人から人へその毒牙を向けていく。

何よりも最悪だったのがその悪魔が、爆発的な感染力を持っていたこと。

接触感染を主な感染源とし、東京の研究施設から徐々に魔の手を日本中へと向けた。

一週間もせずに日本国民の四分の一が感染者となり数日のうちに死していった。

一月もせずに、国家領土の半分がゴーストタウンと化した。

パンデミックと表現するには余りに被害が甚大であった。

民衆は混乱し、政府はその機能を失い、マスコミは隣国のバイオテロを謳った。

事態がようやく動いたのは、博士の死から三ヶ月も後のことだった。

「さて火山さん、博士の死から三ヶ月後にどんなことがあったかわかるかな？」

「はい。国際連合の救済支援措置によって我が国は、国家機能を回復し現在に至ります。」

「うん、そうだね。いい答えです。」

国際連合の救済支援措置。

それは、教科書どおりの模範解答だった。

事態を重く見た各国は、四大元素細菌の研究に乗り出す。

そして細菌に対して、高温の それも人体を一瞬で溶かすほどの 熱風が有効であることを突き止める。

結論から言えば、それは都合のいい侵略行為だった。

超高温の熱風を生み出す兵器など、そう多くは無い。

端的に云えば、大量破壊兵器の使用が、紛れも無い史実だ。

教科書にはそんな事は一遍も書かれていないが、この教室にいる生徒は勿論、五年前に生き残っていた全ての人類がその事実を知っている。

それでも、知らないふりをし、その紛い物の史実を享受するしかないのだ。

ここは既に、独立国家日本国ではないのだから。

「火山さん、じゃあなんでこの細菌が四大元素細菌と呼ばれているか答えられるかな？」

「はい。四大元素細菌の感染者が、四元素説における水、火、土、空気化し死亡するからです。」

「うーん、それだと半分正解、半分不正解って感じかな。正確には水泡化、人体発火、人体の硬化、人体の崩壊の四種類の死亡状況を四元素説に見立てているって感じね。まあ本当は、最後の人体の崩壊つてのも諸説あるんだけどね。」

最初の感染者である医学博士は、ここで云う水泡化で亡くなっている。

本当に人体が液体になってしまっそうだ。

人体発火も同様で、急激な体温上昇とともに体から青い炎が上がるという。

人体の硬化に関しては、かなり便宜的な解釈がされている。

正確に表現しようとするならば、その硬さまさに土を固めたそれも超高硬度の壁だという。

最も謎に包まれているのが、人体の崩壊。

風化や喪失などとも呼ばれるとおり、まるでそこに何もなかったのかのように消滅してしまうそうだ。

従って死体の確認も儘ならず、今日までその全てが謎に包まれている。

兎にも角にも日本は、この得体の知れない細菌によってだけでなく、連合国と称される侵略者達によって蝕まれている。

そして多くの日本人がそれを享受し、現状に甘んじているのが現代日本の姿だ。

誰も何もしようしない世界で、自ら行動を起こさない者が取れる選択肢は一つしかない。

傍観者。

そしてそれが力の無い者なら尚更の事だった。

それが例え無知ゆえの無力さだとしても。

「ちよつと大輔、真面目に授業受けなさいよ。」

「ちゃんと聞いていたさ。今日は遅刻もしていなければ、授業中寝てもいい。それでもまだ文句があるってのか？」

板橋区立竹園高校二年生になって最初の授業が終わった。

前々日に始業式を終え、今日から本格的に授業が再開していた。

と云つても最初の授業ということ、その殆どが一年次の復習やこれから学んでいく内容の確認といった形式をとっていたが。

その新しいクラスでの生活を本格的に始める日に、教室の後方で

一組の男女が何やら言い争っていた。

「そうやってあんたは、聞いた振りしてずーっと上の空だったじゃない。」

「とんだ言い掛かりだね。大体、今日の授業なんて聞くに値しない去年の復習だったじゃないか。」

「ほらー、やっぱり聞いてなかったんじゃない。」

「どうやら口喧嘩では、少女のほうに分があつたらしい。」

「ぎくりとした表情の少年に少女が畳み掛ける。」

「どうやらまた父さんに言いつけて叱って貰うしかないようね。」

「そっ……それだけは勘弁してくれよ。また生傷一つ増やすきか?」

「お昏。」

「は?」

「お昏ご飯、あんたの奢りね。」

少年は怒りの表情を必死に抑えながら、後ろポケットから財布を取り出す。

残金は……六百四十円。

「三百円でどうだ。」

「五百。」

「三百五十……三百九十で手を打とう。」

「はあ? あんた馬鹿? あたしが五百って言ったら五百なのよ。分かる?」

「クソッ……約束だぞ、親父には内緒だからな。」

「どうやら少女の圧倒的勝利で交渉が成立したようだ。」

「分かってるわよ。じゃあそういうことで授業終わったら食堂ね。来なかったら殺すわよ。」

「……はい。」

授業始めでもある今日は、午前中で授業が終わる。

即ち残り三つの授業を残して、少年の昼食が決定した。

この学校の食堂で百四十円以下で買える物は、焼きそばパン以外

には存在しない。

「じゃあ次の授業こそちゃんと受けなさいよ。」

と云って少女は少年の目下を後にした。

(はぁ……今日はこれから三時間も授業か。)

適当にやり過ぎすつもりで出席した拳句、こんな目に会い少年は、残り三つの授業を真面目に過ごすという苦行を強いられ、心底途方に暮れていた。

存外真面目に聞いてみると、授業という物は得てしてどうってことない内容ばかりである。

終業ベルが鳴るまで残り十五分。

「今日は、最初の授業だしこの辺で止めておこうか。」
中年教師のやる気の無い声が教室内に響く。

同時に教室が歓喜に満ちる。

「ただし……ベルが鳴るまでは、教室から出ないこと。」
即座に教室が溜息に満ちる。

それは勿論、少年もまた同じく。

「よう、大輔。今日も嫁さんにたっぷり叱られていますな。」

「幸正……お前はいつになったらその嫁さんてのを止めてくれるんだ？」

真田幸正は少年の一年次よりの同級生で、よく話していた一人だ。活発で人当たりも良く、クラスの中心として全員を引っ張っているタイプだった。

運動神経も良く、陸上部の短距離エースとして、都大会準優勝まで果たしている。

基本的には放課後は部活で忙しいため、行動を共にするのは主に校内のことだった。

「真田君……こればかりは仕方ありませんよ。宮本君は火山さん

には敵いませんからね。」

弱弱しい声で真田に話しかけてきたのは、同じく一年次よりの級友、東大井学だった。

幸正とはまさに正反対の人柄で、温厚柔和で趣味は読書という典型的な日陰タイプだった。

ただ勉学の面では校内でも五指に入るほどで、ひよんなことから幸正と大輔に勉強を教えて仲良くなり今に至る。

「学まで……そもそもあいつは、兄妹みたいなもんだよ。」

「そうよー。勿論私が姉の方けどね。」

「おい、京子……云つとくけど俺のほう身長が高い。だから俺が兄だ。」

「はあ？あんたホントに馬鹿ね。これだから知性も品性のかけらも無い『愚弟』は嫌なのよ。」

「なつ……てめえ!？」

「ねえ明日香もそう思わない？」

男三人の雑談に京子が加わってさらにややこしくなってしまった。

「わっ……私は……その大輔くんも京子ちゃんもとってもいい人だと思います。だから……その……喧嘩しないで……ください。」

やけにモジモジした話し方をするのが、大輔や京子の幼馴染である南雲明日香だった。

二人がいるからこの高校に入学したというくらい極度の人見知りで、幸正や学と普通に会話出来る様になったのもつい最近のことである。

ただ、彼女の言葉には不思議な力があるようで、彼女にこう云われては、大輔も京子も身を引くしかなかった。

「さーて、イチャイチャも済んだことだし……」

「幸正ッ」

「真田ッ」

「昼飯食いに行こうぜ。」

二人の間髪入れぬツツコミもお構いなしに幸正は続けた。

頃合を計ったかのように終業を知らせるベルが鳴る。

教室にいた生徒達は、そそくさと帰り支度を済ませ教室を出て行く。

同じようにして五人も教室を後にするが、向かうのは昇降口ではなく地下食堂の方だ。

幸い午前授業の影響かいつもは生徒で溢れる食堂も今日は閑散としているだろう。

「あたし、Bランチね。」

「……はい。」

大輔の財布から五百円玉が券売機に投入される。

ボタンを押し食券をとるのは、勿論彼ではなく京子の方である。

「俺は焼肉定食にするかな。」

「じゃあ僕もそうしましょう。」

幸正と学も同じ様に五百円玉を券売機に投入し、食券をとる。

明日香は焼き魚定食にしたようだ。

一方、大輔は一人寂しく食堂に併設された購買にて焼きそばパンを購入している。

二十一世紀中期の現代に措いても格差社会の根絶は難しいようだ。各々がそれぞれの食事を持って席に着く。

「よしっ、それじゃあ……いただきます。」

この五人の中では、通例として幸正が食事の挨拶を務める。

「いただきます。」

同じ様にして大輔を除く三人も続く。

「……いただきます。」

一人浮かない声色の大輔も追従する。

「おやおや、元気がありませんね!。」

「ったく、折角の昼飯がこうじゃまずくなるぜ。」

「だってしょうがないだろ……見るこの焼きそばパンを。俺の昼飯は焼きそばパン一つだぞ。」

と云って数口で焼きそばパンを片付ける。

「グスン……俺もまともな昼飯を食べたかったぜ。」

あえて嫌味っぽく京子の方に視線を傾ける。

「ホントあんたってば、小さいことをいつまでもグダグダと煩いわね。」

教室の続きが始まりそうになったのを見かねて明日香が口を開く。

「そっ……そういえば……一時間目の……歴史のじゅっ……授業で

……明日、復習の……」

「そう云えばテストをやると仰ってましたね。」

遮る様にして学が口を挟むが、この場合明日香にとっては助け舟になる。

「えっ、ホントに!?!」

「やっぱりアンタってば、全然聞いてないじゃない。」

「てめえはいつまでも同じことを……」

「それじゃあこの後図書館で勉強でもいかがです?」

さすがに面倒になった学が二人を無視して話を進める。

「おっ、そいつは助かるぜ。ちょうど今日は陸上部も休みだし、折

角だから学や明日香に教えてもらおうぜ。なあ大輔?」

「えっ……ああ、じゃあ俺は一度家に帰って飯食ってきてもいいか? 腹が減つてもたないよ。」

確かに健全な男子高校生の胃袋を焼きそばパンは満たしてくれなかった。

「あっ……大輔、これ食べ切れなかったからあんた食べなさいよ。」
「えっ!?!」

珍しく京子から施しの言葉を聞き、大輔は拍子抜けしてしまった。京子が頼んだBランチは板橋区立竹園高校の名物メニューで、男子生徒でも食の細い学などは食べきれないぐらいの量がある。

Aランチと同じ値段でほぼ二倍の量が味わえ、『四六時中腹を空

かせた狼共』と称される無骨な運動部系男子生徒や、『ピザデブ』と称される大食漢男子生徒に絶大な人気を誇っていた。

それを京子が頼んだのだから、周囲はよっぽどお腹が空いていたのだろぅくらいに考えていたが、どうやら違ったようである。

しかしながらその事実に気づいて、ニコツとした笑顔を浮かべたのは明日香くらいなものであった。

当の本人の京子は少し頬を赤らめて、トレーを向いに座る大輔に差し出す。

「ありがたく食べなさいよね。」

「ったく、食いくれないなら最初から頼むなよな。まあこの場合は、素直に礼を言っとくよ。ありがとうな。」

「うっ……うん。」

二人のぎこちない会話を耳にして明日香はますます笑顔になっていく。

勿論そのことには、鈍感な男共は気づくはずも無いのだが。

「なっ……なにニヤニヤしてんのよ。」

「うっ……うん。なんでもないよ。」

幼馴染として小学生の頃から大輔と京子を見てきた明日香は、いつもと変わらない二人の様子を見えますます顔がにやけてしまった。(ほんと……二人と……もけっ……喧嘩する……ほど……仲がいいなあ。)

無事昼食を終えた一行はそのまま最寄の、北区中央図書館へと向った。

板橋区立竹園高校は、名前の通り板橋区に学舎を構えているが、その場所は帰宅との区界に位置している。

だから板橋区は勿論だが、多くの生徒が北区からの通学生でもある。

五人はその北区からの通学生であるため、帰路の途中にある北区中央図書館を勉強会場とした。

校門を後にし、自転車で駆ける。

くだらない冗談や軽口、噂話や色恋沙汰……数えればきりが無い程の自由があった。

ただ、それは虚構の中の自由にしか過ぎず、誰しもが苦い過去を必死に取り繕って忘れようともがいているだけだった。

だってそこにはいつもと変わらない日常があったし、誰一人としてそんなことを考えてもいなかった。

いや寧ろ考えないようにすることで、目の前に聳え立つ圧倒的な現実を回避したかったのかもしれない。

奇しくも今日、この日大輔達の戦いは始まってしまったのだから。否が応でもこの現実には立ち向かわなければならなかったのだから。

過去【一】（前書き）

作者のおかむと申します。

以下の点に注意して読んで頂ければ幸いです。

・初投稿作品で、誤字・脱字・言葉遣い等におかしな点があるやもしれません。

指摘していただければ嬉しいです。

・SFを謳っていますが、そこまで科学的な知識に富んでいる訳ではないので、かなり拡大解釈等がありますのでご了承ください。

・この物語はフィクションなので、作中に登場する単語・場所・名称等は全て架空のものであります。実在する名称と同様の表記でも一切の関連性はございませんので注意してください。

それでは作品のほうお楽しみいただければ幸いです。

過去【一】

十五年前。

都内某所細菌研究施設。

後に”悲劇の幕開け”とも呼ばれる全ての出発点。

「クソツ……施設内は研究者どころか職員まで全滅か。」

「山本隊長、こっちもです。全員が訳の分からない死に方をしています。」

後に博士の第一発見者として、一部の自衛官や政府要人にその名を知られることになる山本大和は困惑していた。

若干二十七歳で自衛隊の秘密工作部隊の隊長職を任された大和は、原因不明の変死事件に関し原因の究明を命じられてこの研究施設を訪れていた。

彼が隊長職に任命されたのは、対人格闘術や武器使用技術に優れ、隣国の工作活動に対して一定の成果を挙げていたということもあるが、何よりもその医学の知識が評価されていたことだった。

そのこともあってか、大和が率いていた部隊がこの施設を調査することになったのである。

「あとは、一番奥の博士の部屋だけか……。」

廊下に無残に置かれた死体は見るに耐えない姿をしていた。

「最初に云っておくが、ここに足を踏み入れた以上生きて帰れる保証は無い。そのことは覚悟しておいて欲しい。」

「今更、何云ってるんすか。隊長の部隊に配属された時から覚悟は出来てますよ。」

「吉田……まるで人をどこかの鬼軍曹みたいに云いやがって。今日の焼肉はお前の奢りだからな。」

「え〜っ!? そりゃないっすよ〜。」

緊張した隊員達の間、笑顔が生まれる。

このどこか頼れる兄貴分的な所も大和が隊長に抜擢された一つの

理由だろう。

「さあ、気を引き締めていくぞ。この部屋がメインディッシュだ。」
木目の美しいの扉を脚で押し開ける。

隊員達の間にも再び緊張が走る。

「こっ……これは!？」

「隊長……こいつは一体どういうことですか!？」

大和を含む特殊部隊の面々四人は眼前に広がる光景に息をのんだ。そして生まれて初めて見る得体の知れない異物に、瞬時に畏怖の念を抱く。

「これに手をつけるのは後にしよう……。俺達が軽々しく手を触れていいものじゃないかもしれない。まずは手がかりになりそうな研究資料を探せ。」

心なしか大和の声が大きくなる。

(ちくしょう……なんだってこんな……)

隊員達は一先ず目前のそれを詮索するのを止め、室内に散らばった資料を手当たりしだに確認し始めた。

後に博士の死体であると結論付けられた水泡化死体は、まるで死の直前まで博士がそこにいたことを示すかのように椅子の上を濡らし、床へと滴り落ちていた。

「隊長……こんなものが……。おそらく博士の手記かと思われます。」

吉田の差し出した皮製のカバーを纏った手帳を受け取る。

そして、全てを知ることとなる。

後にこの国を覆う巨悪の正体を……。

遡る事、更に一年前。

アメリカ合衆国、生物兵器研究に関する秘密研究施設。

地下深くに建設されたこの施設では、生物由来の毒素や細菌など

を用いた兵器の研究・開発が行われていた。

そこに務めていた日本人医学博士は、研究の最中とある新種の細菌を四つ同時に発見する。

それは各々が致死率九割五分を軽く超越した細菌であった。

単体でも充分強力な細菌兵器として使用出来ることは云うまでも無いが、これらの細菌には致命的な弱点が存在した。

それは超高温の熱である。

また一様に空気の流れ……即ち風にも弱かった。

ほんの少しでも風に触れると細菌は崩壊し、毒素を持たなくなってしまうた。

即ち兵器を用いた爆発の衝撃で飛散する事が不可能であるということであった。

唯一の感染源は感染者同士の接触。

人間のみにも有効であることが分かり、感染すれば即座に体中に広がる。

数日のうちにそれぞれ異なった死体を生み出す。

ただし兵器としての有用性は、著しく低いと結論付けられることとなる。

博士は自分の研究の有用性を信じて疑わない、完璧主義者であった。

しかし現実には、軍事転用できないその細菌に対して上層部が出した結論は研究の永久凍結だった。

博士は日本への帰国を命じられ、日本政府系の研究施設に身を置くことになる。

アメリカからの帰国当日、博士は自分の研究室で手荷物を纏めていた。

そこである事に気付く。

凍結されたはずの細菌が培養容器に入ったままであることに。

そして研究者としての性に負けて、後に世界最悪の悪魔の元となるサンプルを日本へと持ち帰ってしまう。

彼はその細菌の弱点を克服するために、悪魔に魂を売る。

各地の裏病院や、研究者としてのコネクションを生かして生きたままの胎児を引き取っていく。

神をも恐れぬ人体実験が幕を開けた。

胎児たちを人工培養装置の中で育て、そして次々に細菌に感染させていった。

生き残った子供達に更に別の細菌を感染させていく。

淘汰されるべく者は淘汰され、生き残るべく者は生き残る……神様も真つ青な人体実験は半年の後に四人の子供達を生んだ。

子供達は四つの細菌を違う順番で感染させた結果生存した被験児だった。

どうやら最初の細菌に耐えられた者に対して、別の細菌をある一定の順序で投与していくと最初に感染した細菌が拒否反応を起こし、致死にいたる働きを抑制するらしい。

そして多くの犠牲を払って生まれたその子供達から作られたのが、史上最悪の悪魔……四大元素細菌であった。

子供達の体内で混ざり合い、四つの異なる細菌の力を持った新たな細菌は、まさしく致死率十割、完全なる殺人を可能とした。

当初目的としていた弱点の克服には至らなかったものの、博士の目的は達成されてしまう。

これが四大元素細菌の正体であった。

「私は神を超えた存在を作り出してしまった。それは同時に悪魔だということも私は分かっていた。おかしな話だと思うかもしれないが、私はこの悪魔の細菌なんてもうどうでもいいとさえ思っている。それくらい達成感に満ちている。まあ奇しくも自ら最初の感染者となってしまったのは、差し詰め天罰だろうか。唯一の願いがあるとすれば」

手記はここで途切れてしまう。

これが事の顛末であった。

史上最悪の細菌はたった一人の人間のエゴ、欲望、願望によって

作り出されてしまった。

そして、長い長い暗いトンネルへと人々を誘っていった。

(くそっ……たれが。)

大和は手記を読み終え、今は亡き博士に対して激昂した。

「うおおおおおおおおおお」

室内に大和の咆哮がこだます。

「たっ、隊長!？」

「木村……今すぐ本部に連絡を取れ。それから……この研究施設に出入りしていた人間、その家族、友人、知人、近隣の住民、利用していた商業施設やインフラ……くそっ、きりが無い。とにかく本部に繋いでくれ。」

「はっ、はい。」

人と人が触れる機会はあまりにも多い。

多くの部分で機械化や電子化が進んだ現代でさえ、それは変わらない事実だった。

帰宅時の抱擁、電車内での接触に荷物の受け渡し……数えればきりが無かった。

そしてその全ての接触機会において細菌の感染はほぼ絶対であった。

木村が連絡用の秘匿回線を繋ぐ。

「本部長……これから話す事は全て事実であると認識してください。事態は急を要します。」

今確認したことを全て話す……ある一点を除いて。

そしておそらくこの瞬間も感染は爆発的に広がっていることを告げた。

「山本……ご苦労だった。お前達も感染したと考えていいのか?」

「いえ、我々は幸い手袋にマスクを着用していましたので、おそら

く感染は防げたかと思われず。」

『そうか……無事でなによりだ。私はこれより防衛大臣及び、総理に連絡に事態を報告する。お前達は……済まないが数日そこで過ごしてもらおうことになると思う。』

「わかっています。それよりも一刻も早い対処を。繰り返しになりますが、超高温の熱と風のみが細菌を死滅させる手段です。冷凍では、活動が休止するだけです。注意してください。では、失礼します。」

回線が途切れる。

「隊長……どうしてあの子供達のこと、黙っていたんですか？」

「吉田……手記の最後の一言、お前はあれ、なんだと思う？」

「!?!?」

「俺にはな、この子達のことよろしく頼むって見えただよ。この子達が無事であらんことをつてな。」

「しかし、この子達も感染者では？」

「それはないと思う。これは医師としての考察だが、普通感染者はみんな死んでいるだろ？だが、この子達の場合そうじゃない……恐らくオリジナルの四大元素細菌とは違うんだ。体内で混じりあった細菌は別のベクトルへと働き、この子達を生かした。俺はそう考えている。」

「でもこの風貌は……まさに感染者のそれと……同じですよ。」

確かに子供達は、姿かたちこそ違えど施設内に転がっている死体となんら変わりなかった。

小柄な男児は人工培養装置の薄緑色の液体の中で人間の形こそ保っているものの、ゼリー状になって存在していた。

一人の女児は今まさに燃え盛る炎に身を包まれていた。

大柄な男児はまるで大木のような固い皮膚に身を覆われていた。

そして残る一人は、そこにいるのかどうかすらも判断出来なかった。

まさしく四大元素細菌の死亡状況のそれと同じ様な状況にありな

がら、どうやら子供達は同様に生きているらしかった。

「確かにそうだな……。じゃあ確かめてみる必要があるな。」

と云って大和は徐に小銃を肩から下ろすと、燃え盛る女兒が入った培養装置を叩き割った。

同時に液体が部屋の床を埋め尽くしていく。

「!？」

隊員達は驚愕した。

「たっ、隊長!? 何してるんですか!？」

大和は隊員達を一瞥し、女兒を抱きかかえた。

不思議と燃え盛って炎は消え、女兒の姿は、恐らく一歳に手が届くかどうかの、至って健康そうな普通の赤ん坊そのものだった。

まだ薄い髪は美しい緋色しており、どうあっても悪魔の細菌を身に宿した少女には思えなかった。

「という訳だ。どうせしばらく俺達はこちらから出ることも出来ない訳だから、ここで俺が死んだとしてもたいした問題じゃない。だったら、俺は賭けるぜ……。神様ってやつによ。」

慈愛に満ちた両腕で女兒を抱くのは、断固たる意思を持った一人の男だった。

「お前達は、部屋の外で施設からの外出許可が出るまで待機してる。食料は三日分しかないが、尽きる頃には恐らく解放されるだろう。」

目覚しい戦果と功績を残しながらも『稀代の馬鹿』と称される自分達の隊長の本当の姿をはじめて知り、隊員たちは如何様にも表現しがたい感情を抱いていた。

そしてこれからどうするかも満足に決まらないままとりあえず部屋を出て、今日の過ごし方を考えるのだった。

(山本隊長……俺たちはこれからどうなるんですか?)

吉田は大和が一人居残った研究室の扉の前でうな垂れる。

研究施設に来てからちょうど三日が経過していた。

扉の向こうで大和が死んでいてもなんらおかしくは無かった。

食料は既に底を尽き、本部長からの連絡は一切無い。

感染ルートが感染者同士の接触である以上、施設内の食料に手をつけることは可能であるはずだが、現状それを可能にするほど博士の手記が正しいという保障はどこにもない。

吉田を含めた三人の隊員出来る事は、ただただ待つことだけだった。

「木村さん、皆川さん……俺たちこれからどうなっちゃうんですかね……？」

いくら鍛えられた自衛官　それも秘密工作部隊に選ばれるほど優秀な　であっても肉体的には既に限界を迎えていた。

なによりも、辺りに死体が転がっている施設内で五日も過ごして　いては、いつ精神が崩壊してもおかしくなかった。

それを辛うじて繋ぎ止めていたのは、恐らく大和への強い信頼と精神的な支柱としての依存が大きいだろう。

「吉田……お前、その質問何回目だ？」

呼びかけられたうちの一人、木村という男性隊員が敢えて質問で返す。

「木村……今日で……今日だけで三回目だ。」

呼びかけられたうちのもう一人、皆川という女性隊員がその質問に答える。

「すみません。」

申し訳なさそうに、吉田は返した。

この部隊は、自衛隊の数ある秘密工作部隊の中でもかなり特殊な位置付けにあった。

一つは、能動的な武力行使が禁じられた自衛隊の中でも数少ない、先制的自衛権が認められていたこと。

そして国家、国民の不利になりそうな近隣諸外国の工作活動に對して、独断での妨害工作が認められていたこと。

それ故、全国二十五万人の自衛官の中でもずば抜けて優秀な人材が集められていた。

吉田は弱冠二十二歳であるが、射撃訓練や対テロ活動訓練で抜群の成績を残す、若手のホープであった。

格闘戦を除く運動神経の良さに関しては、隊長の大和を上回っている。

木村は対工作活動は勿論であるが、電子工学や機械工学のスペシヤリストで部隊の武器調整や通信等を一手に引き受けていた。

また作戦立案能力や的確な状況判断でも部隊の活動を支えていた。皆川は元日本軍の暗号解読班の祖父とコンピュータソフトエンジニアの父を持ち、自身は元ウィザード級のハッカーという異色の経歴を持つ、対ネット工作のプロであった。

しかし、一見バラバラに見える各分野のエリート達を纏め上げる大和の才覚こそが、この部隊の最大の武器であり、特殊性であると言える。

その大和を扉一枚挟んだ場所に居て、何もできないというもどかしさが彼らの精神的苦痛をさらに高めていた。

（山本隊長……俺たちはこれからどうなるんですか？）

吉田は何度目になるかもわからない質問を声に出さずに扉越しに投げかけ、またうな垂れるのであった。

表の世界の情報もまるで掴めない、隔離された研究施設に生まれる淀んだ空気は、これからの日本を示す縮図そのものだった。

ただただ俯き、現実から目を背けることでしかこの苦痛は拭えそうに無い。

隊員たちは、一刻も早い本部長からの連絡を待った。

過去【二】（前書き）

作者のおかむと申します。

以下の点に注意して読んで頂ければ幸いです。

・初投稿作品で、誤字・脱字・言葉遣い等におかしな点があるやもしれません。

指摘していただければ嬉しいです。

・SFを謳っていますが、そこまで科学的な知識に富んでいる訳ではないので、かなり拡大解釈等がありますのでご了承ください。

・この物語はフィクションなので、作中に登場する単語・場所・名称等は全て架空のもので、実在する名称と同様の表記でも一切の関連性はございませんので注意してください。

それでは作品のほうお楽しみいただければ幸いです。

過去【二】

大和達のいる研究施設から、陸上自衛隊秘密工作部隊本部長である、岩波へ連絡があつてから事態は大きく動いた。

「ですから大臣、事態は一刻を争います。緊急の移動制限とあらゆる産業の停止が必要です。」

大和から連絡を受けた岩波は、議員会館の鳩山防衛大臣の元を訪れていた。

しかし、連絡がつき会うことが出来たのは、報告を受けて既に三日が経過してからであつた。

大和からの報告を全て事実と認識し、早急な手を打つ必要があると判断しての行動にも関わらずだ。

「とはいつてもだね……その、事実確認が取れてない段階で勝手な判断は……できないのだよ。うん、まずは兄さんに報告しないと……。あと、それからほら各省庁とかと調整しなきゃだし……業界の方々とかさ。」

「で・す・か・ら……それでは遅いと仰っているのです。今すぐ、大臣単独でも構わないので、非常事態宣言を発令して下さい。」

「いや、僕じゃ、そんな責任は負えないよ。」

「……では、総理に連絡をとってください。」

「あー、今日ゴルフって言ったからな。プレイ中に電話したら怒られちゃうよ。」

（ツクそ……現場では、今まさに人が死んでいっているというのにこの体たらく……上がこれでは、話にならん。）

鳩山兄弟は、その祖父や父が時代の要職を担った大物政治家で、所謂孫議員と呼ばれていた。

親の七光りという物は大きな力を持っていて、兄である一郎は内閣総理大臣を、弟である二郎は防衛大臣を務めていた。

しかし政治的手腕に関しては、二人とも乏しいとしか言い様がな

かった。

また内閣の編成も、俗に『お友達内閣』と称されるように、政治的手腕や実績を無視して、親しい議員のみで構成されていた。

「わかりました。私のほうから総理に連絡をとってみます。失礼します。」

腸が煮えくり返る思いとは、まさにこの感情を持って以外表現できなかった。

シビリアン・コントロールの弊害をこれでもかと痛感し、岩波は独断で自衛隊を動かせないもどかしさを嫌というほど感じていた。

足早に防衛大臣の元を去ると、携帯電話を取り出した。

掛ける先は勿論、内閣総理大臣である鳩山一郎であった。

関東近郊某ゴルフクラブ。

『も〜えもえもえ、きゅ〜んきゅ〜ん！も〜えもっ』

深い緑と美しく刈り込まれた芝生が印象的なゴルフコースには、恐ろしく不釣合いな深夜アニメのテーマソングが響く。

「ちつくしよう……こんな時に電話かよ。ビリーちゃん悪いんだけどちよつと出ていい？」

「カマイマセンヨ。」

「もしもし……ああ岩波君か。ちよつと僕ゴルフ中だから後に……えっ？細菌？ちよつとそういう難しい話は……緊急って言われてもな〜。じゃあ好きにしていから。え？非常事態宣言を発令してって言われてもな〜、僕の独断じゃそんな無理だよ。」

電話越しの声が冷静なものから、怒鳴り声に近くなっていくのが、周囲の人間ですら分かった。

「そんな怒鳴らないでよ……分かった、帰ったら閣議開くから。それまでは、何もしちゃだめだからね。」

と云ってさつと電話を切った。

「ごめんね、ビリーちゃん。さつ続きはじめよ。」

「ダイジョブデス。ソレヨリ、ナニカアツタンデス力？」

「なんか、細菌感染が止まらないから非常事態宣言を出して移動制限をかけるとか云うんだよ。そんなの無理に決まってるのに。」

（細菌……：そういうえばそんな話があった気がするが、それにしてもこの国の国民は可哀想だな。こんな無能が総理大臣だって！？笑わせてくれる。」

「スイマセーン、デンワーノヤクソークガアルノーデ、カートニイツテキマス。」

「そう？なるべく早くしてね。僕のスーパーショット見てほしいからね。」

「ハ―イ。イソギマス。」

駐日アメリカ大使、ビリー＝ワシントンは、カートに戻ると携帯電話を取り出した。

掛ける先はアメリカ合衆国大統領、ジョージ＝ウイルキンソン。「私です。大統領に至急お話ししたいことが。ええ大至急です。」

チラツと総理大臣の方を見るも、素振りを繰り返すだけでこちらに気を向けてはないようだ。

もしかしたらこれからの進展次第では、世界を動かす事態に発展するかもしれない。

「大統領、例の細菌を持ち出した日本人医学博士のことは覚えてらっしゃいますか？」

「ああ、確か例の施設から持ち出されたとかいう細菌のことか。まだ消息がつかめないそうだな……：それがどうかしたのか？」

「はい。どうやら日本国内で感染が拡大しているようです。ですが、この国の『猿』総理は対処する気がないようです。事の運び次第では大きな戦争、或いは亡国の危機という線もあります。」

「極東防衛は、我が国永遠の課題だ。今、日本を東側陣営に奪われるのは、大きな痛手だ。」

「事がどう動くにせよ、これは同時に好機であります。恐らくこの

まま感染が拡大すれば、何れは我が国をはじめ諸国に救援を求めるでしょう。そうなれば……保護という名目の元、国家を掌握することとはそう難しくないはずです。勿論、我が国が主導権を握れるかどうかは、これからの戦略次第です。」

『なるほど……。確かに日本の抑える事は、極東防衛戦略においてこれ以上無い利点だ。私の方でも、水面下で動いてみよう。』

「ありがとうございます。私ももう少し詳しい情報を集めてみます。では失礼します。」

まさか電話の相手が合衆国大統領だとは、この場にいた誰一人として思わなかったであろう。

（一生、駐在大使止まりで終わりかと思っていたが、こんなビッグチャンスに巡り合えるとは……これだから猿の相手はやめられない。）

「ソウリ、シツレイシマシタ。サア、レッツエンジョイ。」

「よし、それじゃいつちょ狙っちゃおうよ。」

まさに黒い陰謀に塗れた権力が動き出した瞬間だった。

無能な権力は、賢い権力によって動かされていく。

ただその賢さは、梟に代表されるそれではなく、狐の方であったが……。

議員会館の廊下の床を革靴が叩く音が響く。

（まったくこの国の政治はどうかしている……四方やあそこまで能無しだとは。）

総理大臣への電話を切った岩波は、一行に進展しない事態に苛立ちを覚えた。

（ここは単独でも動くべきだろうか。こうしている間にも細菌は日本中へ広まっているに違いない。）

「岩波君……岩波君かね？」

「麻野先生……お久しぶりです。」

麻野太一は前防衛大臣で、外務大臣など国家の要職を度々務めた大物政治家であった。

岩波とは防衛大臣時代に、親交を深めていた。

「どうしたんだね？そんなに慌てて？」

話すべきかどうか迷っている余裕は無かった。

事態は急を要する事、現状起こっていること全てを打ち明けた。

「今すぐにも手を打たなければ、この国は今にも崩壊してしまいます。」

それは悲痛な叫びだった。

「どうか、お力添えを。」

「岩波君、私は君を信頼している。だが、私は今や一人の国会議員に過ぎない。出来る事はそう多くは無いぞ。それでも良いと云うのならば力を貸そう。」

「浅野先生……ありがとうございます。」

「で、具体的に策はあるのか？」

「私は、公には身を出せない人間です。先生には、表に出てこの事実を公表して欲しいのです。」

「それは、最悪の場合人が死ぬぞ。」

「もう何人も死んでいるんです。今はこの事実を知らせることしか我々に打てる手はありません。そしてその事実を知らせるには、できる限り国民の信頼を得ている人が必要なのです。」

語気が自然と強くなる。

「わかった。早急に記者会見を開こう。」

「ありがとうございます。私は、独断で管轄下にある部隊の指揮にあたります。」

「うむ。では、会見の場所が決まり次第また連絡する。」

「はい。失礼します。」

駐日アメリカ大使、ピリー＝ワシントンと同国大統領、ジョージ＝ウイルキンソンとの間で黒いやり取りが為されていたのと、時を

同じくしてここ国会議員会館の廊下において、それとは別の権力が動き出していた。

それは、亡国の危機を救うための重要な密約であった。権力の正しい使い方を分かる人間とそれを知って助けを求める人間との間で交わされたそのやり取りは、大きな動きとなってこの国を動かしていくことになる。

(あとは、彼らに一刻も早い連絡をしてやらねば……。)

岩波は今交わすことが出来た約束を胸にしまい、果たさねばならないもう一つの約束を果たすべく、携帯電話を取り出し議員会館を足早に闊歩していく。

『ピーッピーッピーッピーッピーッピーッ。』

秘匿回線からの着信を示すその音は、研究施設の廊下に響き渡った。

「はい。木村です。」

『岩波だ。遅くなつてすまない。』

吉田が乱暴に通信端末の受話器を木村から奪った。

「もう三日も経ってるんですよ。一体どうなってるんですか？」

既に怒声にすら覇気が無い。

『本当に力不足で申し訳ない。各隊員は施設から退却し、一度本部に帰還して欲しい。』

「本部に帰還て……三日も放っておいてそりやないでしょう？」

吉田の悲痛な叫び声が施設内に響く。

隊員達の悲痛なまでの叫びは、岩波にも痛いほど伝わっていた。『だが、我々には時間が無いんだ。感染者は徐々に広がっている。マスコミもちらほらと気づきだしている。君達が現場から持ち帰る証拠無くして、国家は動かせない。』

「だからって……クソッ……分かりました。」

『申し訳ないが、別動部隊は送れない。自力で本部まで帰還して欲しい。手段は問わない。』

「……了解しました。」

岩波にとつても断腸の思いでの決断だった。

岩波の指揮下にある部隊は、情報収集や警戒任務をそれぞれ行っていた。

一刻の猶予もない現状で、大和達の部隊を迎えに行かせる余裕は無かった。

『では、本部にて待っている。』

回線が切断される。

「クソッ」

「吉田……冷静になれ。私達にはまだやる事があるぞ。まずは隊長に知らせよう。」

吉田の言葉は隊員達の代弁だった。

だから、木村も皆川も敢えて止めなかった。

そして皆川の言葉の通り今為すべき事は、目の前の扉を開ける事だった。

「隊長、失礼します。」

木村の呼びかけに対して、大和からの返事は無い。

三日前に閉じられた木目の美しい扉が再び開く。

「たい……ちよう？隊長おおおお」

扉を開けた隊員達の目に飛び込んできたのは、机に突っ伏したまま微動だにしない大和の姿だった。

「たいちよおおおおおお」

膝を着き吉田が絶叫する。

「うっ……うああああああああああああんん」

木村と皆川はぎゅっと唇を噛み締める。

「えっ……うええええええええええええんん」

（ん？）

泣き声が増える。

「うっうっん腹減ったああああ。」
声が一つ増える。

(え?)

「おお、お前ら。施設からの退却許可は出たのか?」

「たっ……隊長、生きてるん……ですか?」

「当たり前だろ。俺を誰だと思ってるんだよ。まったく吉田が騒ぐから泣き出しちゃったじゃねーか。」

そう云う大和の足元には、緋色の髪をした赤ん坊が座って泣いていた。

「賭けは俺の勝ちみたいだな。」

にやりとした大和は、勝ち誇ったように自らの部下達を見渡した。

「まったく……あんたって人は、殺しても死なないね。」

皆川は鼻を嚙り、笑顔を送り返した。

「ほんとに。よくぞご無事で。」

木村は目頭を押さえ呟いた。

「たいちよおおおおおおお」

吉田は緊張の糸が切れたのか、またわんわんと泣き出した。

「吉田はしょうがねえな。木村、首尾はどうなった?」

「はい。本部長から帰還の命が下っています。」

「帰還か……。その前にこいつらをどうするかだな。」

「本部には知らせないのですか?」

「ああ。こいつらの存在を本部に知らせると、恐らく研究の後、殺されちまうからな。」

「では……どうするんですか?」

(子供達を安全かつ秘密裏に保護できて、尚且つ治療の方向性をさぐるとなると……。)

「うーん。木村も皆川もまだ独身だったよな?」

「えっ、何ですか急に?」

「お前ら悪いけど、一人ずつ育ててもらいたいんだけど。」

「!?!?」

「そついうこと。」

「皆川は察しがいいな。この子達はおそらく細菌を体内に保持しているが、それは他者には感染しない。しかも肉体の状態変化を維持したまま生存出来るってことだ。この子達を安全かつ秘密裏に保護するには、この事実を知っている俺たちが育てるしかないってことだ。」

「しかし、いくらなんでも無茶じゃないですか？」

泣き止んだ吉田が話に参加してくる。

「お前には頼んでねえよ。」

「そついう事じゃなくて……」

「お前はまだ若い。この子達を任せるには若すぎる。」

「年齢に関しては若いって云っても木村さんも皆川さんも僕と三つしか変わらないっすよ？それよりも木村さんも皆川さんもこれから結婚とか考えてるんじゃないのかってことです。」

吉田の疑問にも一理あった。

「吉田……私は本来ならネット犯罪に関する懲役刑が数十年あつてもおかしくない人間だ。恩赦の見返りが、この部隊における活動ってのは前に話した通りだ。」

「俺も同じようなもんだ。今までの任務で何人殺したかわからない。今更結婚なんかしようと思わないよ。」

吉田には返す言葉がなかった。

「吉田……お前に人間を相手に引き金を引く勇氣はあるか？俺たちは皆そついう十字架を背負って生きてるんだ。お前にはまだ掴める未来も見れる夢もあるってことだ。その上子供を育てるなんて重荷を背負わせられるかって事だ。」

大和の言葉が重く響く。

「木村、皆川……すまないが、頼めるか？」

答えは聞くまでもなかったようだ。

「そつと決まれば、私はこの水の子を預かるう。」

皆川はゼリー状になった男児の入った培養装置を小銃で叩き割っ

た。

薄緑色の液体が、部屋の床に広がる。

「俺は、壁みたいな子供を。」

同じようにして木村は皮膚が硬化した大柄な男児の入った培養装置を破壊した。

二人は同じようにして子供を抱きかかえると、不思議な感覚に包まれたように微笑みあった。

水泡化の症状を負った子供は、端正な顔立ちに細い目をしていて、皮膚の硬化の症状を負った子供は、頬を赤く染めて優しそうな顔を木村に向けていた。

「それじゃ俺はこの緋色の髪の子と、もう一人か。」

大和が目を向けた培養容器は、確かに何かがあるがそこには何も見えなかった。

ただ時折気泡が生まれては装置の上面へと浮いていく。

『検体D』と書かれたプレートが付けられたこの培養装置の中には確かに何かが生きている。

大和は最初の時と同じように、培養装置を叩き割った。

ガラスの割れる大きな音と共に中から姿を現したのは、本当に普通の可愛らしい赤ん坊だった。

それぞれが四大元素細菌の大元となる細菌を身に宿した悪魔の子であり、同時にそれは赤ん坊が等しくそうであるように、まさしく天使の子でもあった。

「名前……つけてあげませんか？」

吉田が子供を抱く三人に提案する。

皆川は、抱きかかえた子供が入っていた培養装置に目を向ける。

印された文字は『検体M』。

「まもる……この子は皆川葵だ。」

「良い名前ですね。木村さんは？」

木村も同じようにして培養装置に目を向ける。

印された文字は『検体Y』。

「決めた。この子には優しく育てて欲しいという願いを込めて、ゆうじ……木村優治だ。」

大和はどうにも考えが纏まらなかった。それは、一つの不安を意味していた。

急に兄弟でもない子供を二人も育てるとなると、当然周囲の反応も大きく変化する。

ましてや誰にもこの秘密を知られてはならない。

「俺は……もう少し考えさせてくれ。」

「そうっすか。」

「それよりこれからの事を先に話しておく。まず俺と木村、皆川は本部には戻らず俺の家へ直行する。幸い、子供達の俗に言う健康状態に異常はなさそうだが不安もある。病院へは行けないから俺の家でしばらく様子を見ることになるだろう。」

賢明かつ最善の判断であろう。

「本部へは、吉田が先行して戻り状況を報告。とにかく時間を稼げ。その間に皆川は、出生届や戸籍の改竄をもらう。木村は俺と皆川のサポートを頼む。」

現状打てる最善の手。

子供達を守り抜く上で、可能な限りの術。

隊員たちも大和の立案に反論はなかった。

「よし。そうと決まれば、後は俺の名付けだけだな……女子の方は……」

最初に叩き割った方の培養装置に付けられたプレートには「検体

K」の印字。

「きょうこ……名前は京子だ。姓は火山。」

「姓は山本じゃないんですか？」

「急に子供が二人も増えるのは、あからさまに不自然すぎるからな。俺は死別した元同胞達から一文字貰って性にする。」

「なるほど。」

「男の子の方は、大輔……宮本大輔だ。」

不意に男児は微笑んだ。

「この子笑ってますよ。」

その笑顔は、自らに課せられたあまりにも重過ぎる枷などまるで知らない。

その笑顔は、これから訪れる数々の試練など何も知らない。

知っているのは、その日みた男の顔をこれからもずっと見ていくということ。

それでも大和には、その笑顔が未来への希望を示しているように思えてしかたなかった。

「さあ、行こう。戦いはこれからだ。」

山本大和率いる、自衛隊の秘密工作部隊の隊員達は、全ての始まりである研究室を後にした。

これから待ち受ける現実など何も知る由もなく。

過去【三】（前書き）

作者のおかむと申します。

以下の点に注意して読んで頂ければ幸いです。

・初投稿作品で、誤字・脱字・言葉遣い等におかしな点があるやもしれません。

指摘していただければ嬉しいです。

・SFを謳っていますが、そこまで科学的な知識に富んでいる訳ではないので、かなり拡大解釈等がありますのでご了承ください。

・この物語はフィクションなので、作中に登場する単語・場所・名称等は全て架空のものです。実在する名称と同様の表記でも一切の関連性はございませんので注意してください。

それでは作品のほうお楽しみいただければ幸いです。

過去【三】

研究施設を出た大和達は巨大な困難に立ち向かうことになる。
東京都北区山本の自宅マンション。

無事に子供達を保護することに成功した大和達だったが、日本の権力の無能さが最悪の事態を招いている事に気づかされる事になる。

「おい……木村、テレビ点ける。」

大和の部屋で戸籍の改竄を行っていた皆川が大声を上げる。

木村は気圧されながらも、云われた通りテレビを点ける。

『日本国民の皆様。麻川太一です。我々は今未曾有の危機に瀕しています。』

ここからの展開は、大和が岩波に報告した通りの内容だった。

報告から三日も経過してやっと国民に知らされる事実。

「一体どうなってやがる……。」

大和は驚きを隠し切れなかった。

同時に無理を承知でも、施設を脱出しなかった事を後悔した。

恐らく既に相当数の感染者……或いは死者が出ている可能性がある
った。

「どうやら本部長からの連絡が遅くなった原因は、これのようです

ね。」

「!?!?」

木村は冷静に状況を分析していた。

自分達が置かれた状況と麻川太一が記者会見を行っている、という点と点を結びつける。

「これは推測に過ぎませんが、本部長は恐らく最初、鳩山防衛大臣に事実を報告しているはずです。勿論、次に鳩山総理大臣へ。」

「あのボンクラ兄弟か……なるほど。」

鳩山兄弟に政治的手腕が見込めない事は、大方の政府関係者は分かっていた。

それでも彼らが、政府の要職に就いているのは、やはり大物政治家の孫であるという事が大きかった。

そしてもう一つの理由が、国内の利権絡みの問題である。

強欲で我儘、世間知らずで無知な彼らは、常にそれを利用してという人物に囲まれている。

トップに据えて煽っておけば、こうも扱いやすい存在はいない。

本来ならそんな事が世間に納得されるはずが無いが、鳩山兄弟には絶大なネームバリューがある。

この状態は、日本という国家が甘んじて受けるべきものであった。

「本部長の報告は、恐らく無視されたでしょう。仕方なく話の分かる人物の中で、国民に顔が利く麻川議員に目をつけた。麻川議員は鳩山兄弟とは一線を隔していましたからね。」

岩波が麻川太一に声をかけられたのは、全くの偶然であったが山本の考察は、大部分が的を射ていた。

「これで、ようやく非常事態宣言が発令されるな。」

「それはどうでしょうか？鳩山兄弟にとっては、これは屈辱的な行為です。国家の一大事を発表を自分達ではなく、よもや一議員に先を越されたのですからね。」

「まさか……いや彼らならありかねない……。」

愚者は自らの失敗を認めない。

故に愚者であり続ける。

失敗を認め、それを改善し次に繋げるものが本当の賢者である。

「兎に角、我々は先を急ぎましょう。皆川も作業を続けて。」

木村が冷静に諭す。

こんな状況でこそ、冷静沈着かつ頭脳明晰な木村の判断能力が最大限に発揮されるのだった。

大和は改めて部下に恵まれた事に、幸福感を感じていた。

「そうだな。急がないと吉田がまた泣いちゃう。」

室内にわずかながら笑顔が生まれる。

今自分に出来ることは、目の前に眠る子供達を見守ることだった。

そして改めて強く決意するのだった。

(こいつらは、絶対俺が守ってやる。)

子供達の寝顔は、今起きている事なんてまるで関係ないかのよう
に安堵に満ちた表情であった。

自衛隊秘密工作部隊本部。

都内某所にいくつかある拠点の内、最大の規模を誇る施設。

時間稼ぎという重要な任務を託された吉田は、本部長室へと向っ
ていた。

(しかし隊長も無茶云うよな)。時間稼ぎって一体どうすりゃいい
んだよ。)

地下へと降りるエレベーターの中で、言い訳を考える。

(最善の言い訳は、エンジントラブルで俺だけ走ってきたとか…い
や無理があるな。)

エレベーターが本部長室のある階に着く。

(あーもう、なんも思いつかん。だいたい俺に頭使えってのが無理
って話なんだよ。)

廊下を進み、本部長室の前に辿り着く。

(ダメだ。こうなったら、流れに身を任せて作戦だ。)

「失礼します。」

「入れ。」

扉越しに本部長の声が聞こえる。

「山本隊、吉田帰還しました。」

岩波の眉が動く。

首だけを動かし、吉田越しに扉の方に目を向けるが、誰もいない。

「山本や他の隊員はどうした?」

「はい。トイレに行っています。」

吉田は疑いの目に対しては目を背けてはいけない、という大和の

教えを思い出ししていた。

「教えてじつと目を見る。」

「そうか。全員揃ってからでも良いが、事態は急を要する。先に話せることだけ話してもらおう。座ってくれ。」

（あぶねー。）

落ち着きを取り戻すように深い息をして、席に着く。

「失礼します。」

そこからは、電話で話した内容と大差なかった。

現場で確認した博士及び職員の死、手記や研究資料の内容。

勿論可能な限り持ち出した資料を手渡した。

手記を大方読んだ岩波は読中、再三に渡り眉を顰めた。

「失礼します。山本です。」

岩波が手記を読み終えたとほぼ時を同じくして、大和達が到着した。

「入ってくれ。」

大和達が入室するが、皆川の姿は無かった。

「随分長い用だったな。」

大和と木村は吉田を一瞥し、着席した。

申し訳なさそうな表情を吉田が浮かべる。

「ええ、長いこと緊張状態にあったので。皆川は女性ですので、今日は帰宅させました。」

皆川は万一に備え、大和宅に待機させていた。

「そうか。仕方ない。大方は吉田君の話と収集してきた資料から把握したが、一つだけ質問がある。」

「はい。」

「まず、報告には一切なかったが、手記にある細菌の大元となる細菌を体内に宿した子供達の所在は？」

岩波は一番痛いところを的確に突いて来た。

五十歳にして自衛隊の裏トップとまで云われる、秘密工作部隊の本部長にまで上り詰めた辣腕は確かなようだった。

「子供達は既に処分されていたようです。培養容器も博士が死亡する時に暴れまわったのか、破壊された痕跡がありました。」

木村は至って冷静に、あくまで自然に問に対して答えた。

「そうか。しかしまずい事になったな。」

「と、云いますと？」

「アメリカは細菌の性能を知っている。もし国内で感染が進んでいる事実が知られば、恐らく何らかの介入をしてくるだろう。」

大和はそこまでの事態の悪化を考慮していなかった。

山本も目先の困難への対処で後手後手になってしまい、そこまでは考えが至らなかった。

「それって何か問題なんですか？」

大和は溜息をついた。

「ここで云う介入とは、イコールして侵略のようなものなのです。この国は忌わしき、東西冷戦における西側陣営の最前線と認識されています。アメリカだけじゃありません。ソビエト連合や中華帝国などの東側の大国も経済的、軍事的側面から見てこの国は喉から手が出る程欲しいはずですよ。」

大和の代弁をするかのように山本が答える。

「そんなこと許されるんですか？」

「勿論看過される訳ないです。ただ、それが侵略ではなく、国際的に見て正当性を伴った委任統治とか管理という名目になれば話は別です。」

「いまいち理解できないんですけど………すみません。」

痺れを切らして大和が割って入る。

「あのな、この細菌の弱点は何だか分かるよな？」

「えっと………手記によれば超高温の熱と風でしたっけ？」

「感染したら治療は恐らく不可能だ。しかも接触するだけで感染するし死体も細菌を保持する。いくら弱点があっても、人体の中にある細菌に超高温の熱や風を当てることなんて不可能だろ？つまりは感染の疑いがある人間を全て一度に処分する必要があるってことだ

よ。」

「まさか……？」

「そういうことだ。細菌の大方の潜伏期間である三日から五日程度の移動禁止令を出して、非感染者を隔離する。後は街ごとドカンだな。その後は、復興支援とか委任統治って運びだ。しかも細菌を作ったのは日本人の医学博士だ。これが世界に拡散したらそれこそ大問題だろ？それをする正当性はばっちりってことだ。」

吉田も改めて事の重大さを理解した。

今自分達が直面しているのは、紛れも無い亡国の危機だったのだ。余りにも現実感の無い事だけに感覚が麻痺していたが、今の話でようやく気づかされた。

「それで、岩波本部長……どうしましょうか？」

顔が強張ったままの吉田を放置したまま、大和は話を続ける。

「無論、放置はできない。だが、公表してしまつた以上、もう全世界に広まっている。そこまで考えが回らなかったのは痛手だが、我々も動かざるを得ないだろう。」

岩波は決意を新たに、深く胸に刻み込んだ。

「だが、今日はもう遅い。事が動くとすれば明日以降だ。今日はもう休んでくれ。」

岩波の云う通りだった。

大和達の疲労はピークに達していた。

「わかりました。明日またお邪魔します。今日は失礼します。」

大和達は立ち上がり、本部長室を後にした。

そして再び、大和の自宅マンションに戻り仮眠をとるため車を走らせるのだった。

発表の後であった為か、車通りは疎らだった。

奇しくも通り過ぎる街の街頭の明かりは小さく、大和達が目指す小さな希望への可能性の低さを暗示しているかのようにさえ思えるのだった。

駐日アメリカ大使館、大使室。

大和達が本部長室で会談していたのとほぼ時を同じくして、電話越しに黒い会談が執り行われていた。

「ええ。その通りです。麻川が、事実を公表しました。恐らく、彼の人脈から察するに自衛隊関係者からの情報でしょう。」

『だとしたら、これは我々の思惑通りということかね？』

「そうです。後はあの『猿』と国際連合を上手く動かしてやれば、首尾よく事は運ぶかと。」

『だが、しばらくは様子見が必要だろう。こちらから動いてはいけない。あのボンクラの方から助けを求めてくるのを待つんだ。』

「心得ております。それでは、また何かありましたら連絡致します。それでは。」

（まさか自ら世界に発信してくれるとは……思ったよりも事が上手く運んでいるな。）

受話器を置いたビリーの表情は悪人のそれであった。

彼の野望は果てしない。

薄暗い大使室にねちっこい高笑いが響いた。

麻川太一の緊急記者会見から一夜明け、混乱は一層深まった。

感染源が接触であるという事実から、多くの交通機関がストップし経済活動はその多くが停止せざるを得なかった。

一部機能していたマスコミは記者会見の直後から番組編成を大きく変え、大部分が緊急特番と銘打って、この未曾有の危機を報じていた。

ただその多くが推測の域を出ない、隣国のバイオテロを謳ったものや、無意味な感染予防対策などといった内容であった。

死者は確認できるだけで三千万人とも四千万人とも言われた。

特に研究所からの距離が無く、拡散スピードを助長する鉄道網が広がっていた関東近郊は被害が甚大で、人影も疎らになる程だった。無事だったのは、なんらかの要因で隔離されたりしていた一部の人間だけであった。

肝心の政府の中枢である内閣閣議室では、議論とも呼べない責任の擦り付け合いが始まっていた。

「兄さん……どうするの？」

「黙れ二郎……くそっ麻川のやつめ。これではまるで俺が無能みたいではないか。」

鳩山総理大臣は、国民の死よりも自らが先導できなかった事が何よりも気に食わなかった。

「とにかく、これで非常事態宣言なんて発令したら俺の面子が丸つぶれだ。暫くは事態の対処にあたる為とかこじつけてマスコミには対応しない。その間に策を寝る。」

ここで云う策とは、感染拡大を防ぐ術ではない。

自らの身の安全と面子を守るための術だ。

「兄さん……ぼっ僕は……どうすれば……いいの？」

「知るか。俺は一度官邸に戻る。」

鳩山総理は、足早に閣議室を後にした。

国家の頭首たる内閣総理大臣の余りにも無能っぷりには、利用するために取り入った各大臣も呆れる程だった。

しかしどうすることも出来ず、再び責任の押し付け合いが始まるのであった。

閣議室を出た総理は、官邸の自室に戻るとアメリカ大使館へのホットラインを繋いだ。

『ハイ、ビリーデス。ドーシマシター？』

「ビリーちゃん、実は相談したいことがあってね。」

事態はビリーアメリカ大使の考えたように運ぶ。

鳩山総理は、自身の保身を第一にアメリカに助けを求めた。

この瞬間、黒い陰謀の歯車の歯が、また一つまわる。

『ナルホドー。ワターシニカンガエガ、アリマース。』
ビリーの考えはまさしく、大和達が危惧していた事そのものだった。

本来国家の首領として、受け入れられるはずのないその悪魔の提案も、患者の権化たる彼の前では大きな意味を持つ。

鳩山一郎という男の頭にあるのは、細菌の拡大を防ぐことなどではなかった。

ましてや国家の存亡などどうでもいい。

今重要なことは、いかに自らの地位と身を守るかであった。

「敵は、麻川と自衛隊か……。なるほど名案だね。」

恐るべき方向へと向うレールに、列車が乗った瞬間だった。

後は、もう進むしかない。

不幸なほど潤沢に、列車を動かすエネルギーは豊富だった。

『ソウリー、アセラナイテクダサーイ。イマスグニハ、ムリデース。ソウリー、コレーカラワターシノイウトオリニシテクダサーイ。』

国家は政府によって見捨てられた。

博士の死から一週間が経過し、ようやく非常事態宣言が発令された。

云うまでも無く、遅すぎた。

移動禁止令と死体を含む人間同士の接触が禁止され、まはや人間は人間たる由縁を失っていた。

恋人は触れれば切れるナイフ、家族はいつ踏むか分からない地雷と同義だった。

暫くは国際連合による食糧支援などで、なんとか生活を営んでいたが、長くも続かなかった。

一人感染者が見つければ、その地区を一定期間、完全封鎖する策

がとられ、一月もすれば日本の領土の半分がゴーストタウンと化した。

事態が動いたのは、博士の死より三ヶ月後の事であった。

それは、全世界が注目していた国際連合での鳩山総理大臣の演説から始まった。

『我が国で起きた、一連の騒動に関する調査結果を報告します。我々の調査によれば、細菌を開発した医学博士に研究施設を提供したのは、我が国の参議院議員、麻川太一であるという事が判明しました。』

「なんだと……!?!」

(やられた。)

本部長室に詰めていた山本達は苦虫を噛み潰す思いだった。

この三ヶ月間、岩波の支持の元、出来る限り感染者を減らすべく各地を奔走してきた。

まさかその裏で、こんな陰謀が動いているなど思いもなかった。

『また、麻川太一は元防衛大臣としての人脈を生かし、自衛隊と共にクーデターを企てていたことも判明しました。』

「そんな馬鹿な!?!」

「一体どこの馬鹿がそんな浅知恵をつけさせたんだ!?!」

恐れていた以上の事態であった。

ビリーの策略は、一切の邪魔さえ入らずに完璧に列車を駅へと進入させた。

後は悪魔という名の乗客を駅へと降ろすだけであった。

『我々は今まさに亡国の危機を迎えています。しかし我々は細菌にもクーデターにも屈しません。麻川の身柄は既に確保しましたが、自衛隊のクーデターは恐らく続くでしょう。尽きましてはアメリカ合衆国に支援を要請しました。大統領、お願いします。』

「浅川先生……くつ。」

岩波は頭を抱えた。

ジョージ・ウィルキンソン合衆国大統領が登壇し、鳩山総理と笑

顔で握手を交わす。

『今、鳩山総理大臣がお話された通りです。これは我々だけの問題ではありません。世界は手を取り合って亡国の危機に瀕した日本を救うのです。』

鳩山総理とウィルキンソン大統領の世界を相手にした、一世一代の大芝居だった。

事実を知るのは、極僅かな人物だけだった。

『我々は、東アジア各地の駐屯地及び太平洋艦隊より爆撃機を発信させました。標的は自衛隊施設及び、感染区域と指定されたエリアです。協力していただけの国家は、これに追従してください。』

形容するならば絶望という言葉が正しかった。

「皆川、衛星に繋げるか？」

皆川は既に為すべき事を把握していた。

コンピュータの画面を見つめた皆川は目もくれずタイピングを続けた。

「繋がりました。小笠原沖十海里の地点に太平洋艦隊を確認できます。」

木村は画面を覗き込んで一点を注視した。

「デッキが空いている……恐らく、爆撃機はもう飛び立っているはずです。」

二人の国家元首による演説はスタンディングオベーションをもって終了した。

即座にスタジオに切り替わり、速報が伝えられる。

『市民の皆さんは、室内から一步も外にでないでください。これより先、四十八時間の外出が禁止されます。感染エリアには一切立ち入らないでください。』

完全に出遅れてしまった。

巨悪に対処するには、事実を認識し立ち向かう人々があまりにも少なすぎた。

「山本君。我々が進むべき道はまだあると思うかい？」

大和には返す言葉が無かった。

弱冠二十七歳で特殊工作部隊の隊長として数々の修羅場を潜って来た大和でさえも、これ程の困難は初めてだった。

「本部長、進言があります。」

口を開いたのは、皆川や木村でもなく吉田だった。

「云ってみる。」

吉田は、大きく息をすると話を切り出した。

「たぶん、もう戦闘は止まらないでしょう。そして負けます。僕たちはこの戦闘に参加すべきじゃありません。」

「それは、同胞達を見殺しにしろということか？」

「その通りです。」

「てめえ、どの口がそんな事云いやがる。」

黙っていた大和は立ち上がり向かいに座った吉田の胸倉を掴んだ。慌てて木村が止めに入る。

「だって、ここで俺たちが死んだら一体誰がこの事実を世界に伝えるんですか？」

吉田の涙声の混じった叫びは、真理だった。

「隊長、自分も吉田の意見に賛成です。犠牲は余りにも大きいです。が、それよりも多くの守るべきものがあります。」

「私も同意見です。」

木村と皆川も吉田の意見に賛同する。

「山本……私も吉田君の意見に従うべきだと思う。今私の指揮下にある秘密工作部隊は七つの拠点到総勢二百名ほどだ。勿論我々は自衛官であるが、公には自衛官ではない。今ここで表舞台に出て戦う事は容易だが、恐らく全員が死ぬことになる。むしろ吉田君の意見の通り、ここは敢えて身を引き、身を隠そう。」

「しかし……つく……わかりました。」

無実の疑惑によって攻撃に晒される全国二十五万の自衛官達。

彼らの無念を思うと大和は、居た堪れない気持ちになった。

「そうとなれば、ここは放棄する以外にないな。身分を偽り、機を

待つ。仲間を集め、武器を揃え、巨悪に立ち向かう力を身につけるんだ。」

方向は定まった。

限りなく絶望に近い……近いが、希望への道を捨ててはいない。

「そうと決まれば、全隊員に連絡を取らねばならないな。」

皆川がそつと通信端末の受話器を差し出す。

「どうぞ。各拠点の秘匿回線と繋がっています。」

「うむ。岩波だ。各拠点にて待機中の全隊員に告ぐ。心して聞いてくれ。我々は現時刻を持って、自衛官としての職務を放棄。これより、連合国の侵略行為及び腐敗した政府に対抗すべく、潜伏を試みる。詳細は後程、説明する。各員は装備を整えて、ニーイチマルマルに集合すべし。場所は……北区中央図書館。以上。」

受話器を置いて岩波が、一つ大きく息をする。

「北区中央図書館？どうしてまたそんな場所に？」

吉田はあまりにも拍子抜けしてしまった。

「北区中央図書館は、旧日本軍の武器・弾薬庫を改築して建設された図書館なんだよ……表向きはな。」

「表向き？」

「ああ、改築されたのは倉庫部分のみ。そして秘密の入り口を抜けた先にある地下室に、日本軍時代の秘密作戦参謀室と武器・弾薬生産工房や設計図が残されている。」

「そんな馬鹿な。そんな話聞いた事ありませんよ。」

今度は木村が疑問を投げかける。

「だから秘密なんだろ。」

全ての事実だと認識し、大和が立ち上がる。

「すまんかったな吉田。我ながら熱くなってしまった。」

そこにあつたのは、いつもの大和の姿だった。

凜とした顔で、隊員たちを見渡す。

「よし。そうと決まれば本部長。早急に向いましょうか。」

覚悟を決め、扉を出た瞬間全てが動き始める。

勝ち目はこれ以上無いくらい薄いであろう。

それでも前に進むことでしか、彼らに希望を掴む術はなかった。

「ちよつと待つてください。俺たちってこれから一体何になるんですか？」

吉田は不意に疑問を投げかける。

「何ってそりゃ……さしずめレジスタンスってどこか。」

「レジスタンス……俺たちはレジスタンス。北区中央図書館レジスタンス！なんか燃えてきたー！！」

吉田の変なテンションに周囲も自然と笑顔になる。

感情に素直で、真っ直ぐな吉田の言動は周囲に様々な影響を与える。

時には人を怒らせ、時には人を勇気付ける。

本当は胸が張り裂けそうなほど苦しい現状にも関わらず、心なしか大和達は元気になっていくような気がした。

それが例え虚勢だったとしても、今の彼らにとってはこれ以上頼もしいものはなかった。

そこからの顛末は、歴史が示す通りであった。

連合国の爆撃は、自衛隊をほぼ壊滅に追い込んだ。

細菌はほぼ全てが根絶やしにされたが、対価として国家の多くが焦土と化した。

国民も最初は連合国の援助行為という名のそれを最初は歓迎したが、時が経つにつれ事態の本当の姿に気づく。

治安維持の名目で警察権が没収される。

情報の混乱防止の名目で報道が規制される。

正しい教育を行うという大義名分で、歴史が改竄されていく。

それでも、日本には誰かの力を借りずして立ち直る力はなかった。そしてそこから長い長い占領された国としての歩みが始まるこ

となる。

相変わらず政府は機能を失い、委任統治という名目で各地が大国の管理下に置かれる。

地図上、そこは日本国に変わりないが、中身は既に外国だった。

北海道はソビエト連合、九州は中華帝国、他全てをアメリカ合衆国が手中に収めた。

形骸化した日本政府は、イエスマンとしてテーブルに座り、血税を餌に肥えていく豚に過ぎなかった。

北区中央図書館レジスタンスはその中において忍び、蓄え、機を待つことに徹した。

幸いだったのは、図書館がすでに機能を喪失していたこと。

記録を改竄し、その職員に成りすますことは造作も無い事であった。

レジスタンスの面々は、旧日本軍の施設などを中心に、新たに各地に拠点を築き、少しずつ根を太く、遅しく広げていった。

事態が大きく動くのは、これより十五年も後の事だった。

過去【三】（後書き）

最後はやたらと長くなってしまいました。

過去編三編無事終了。

主人公が登場しない回が三回も続いてしまった。
次からはちゃんと主人公が登場します。

予兆（前書き）

作者のおかむと申します。

以下の点に注意して読んで頂ければ幸いです。

・初投稿作品で、誤字・脱字・言葉遣い等におかしな点があるやもしれません。

指摘していただければ嬉しいです。

・SFを謳っていますが、そこまで科学的な知識に富んでいる訳ではないので、かなり拡大解釈等がありますのでご了承ください。

・この物語はフィクションなので、作中に登場する単語・場所・名称等は全て架空のもので、実在する名称と同様の表記でも一切の関連性はございませんので注意してください。

それでは作品のほうお楽しみいただければ幸いです。

予兆

北区中央図書館。

七十五万冊の蔵書を有し、区民の憩いの場として大きな役割を担っていた。

また、北区中央公園に隣接し、旧日本軍の武器・弾薬倉庫の赤レンガを生かした改築が為された景観は、公園とも相まって評判が良かった。

ただ、先の四大元素細菌のパンデミックによる連合国の侵略によって、その周囲を取り巻く環境は、大きく変わってしまった。

自衛隊に対する攻撃は、図書館の目と鼻の先にある自衛隊の駐屯地にも及んだ。

駐屯地は全壊し、多くの自衛官が犠牲となった。

十五年経つ現在では、アメリカ合衆国軍の基地として整備され、周囲の治安維持や極東防衛の任務に用いられていた。

大輔達一行は、明日の歴史の授業で行われる一年次の復習テストの試験勉強をするため、同図書館を訪れていた。

「すいません。多目的スペースをお借りしたいんですが。」

図書館の受付で学が多目的スペースの借用を申し出た。

多目的スペースは、大ホール、中ホール、和室の三部屋が設けられた特別室で、区民に無料で解放され、社交ダンスやセミナーなどに利用されていた。

「はい。現在は大ホールと和室がご利用できますが、如何致しますか？」

「和室を二時間程利用できますか？」

「本日は特に予約は入っておりませんので、他の利用者さんが来られない限り、可能ですよ。」

「では、それでお願ひします。」

学らしい、丁寧な受け答えだった。

五人は階段を登り、二階にある多目的スペースへ向った。

三部屋あるうちの和室は一番奥にあり、窓から公園が一望出来るため、囲碁クラブの老人などに人気だった。

「おつ、大輔ー来てたのか。」

「……？なんだ吉田さんか。」

「なんだとは、ひでーな。京子ちゃんもいらっしやい。今日は皆でお勉強かい？」

「はい。明日テストで。」

「そつか。学生は大変だねー。それじゃあ俺は仕事があるから、またね。」

高々と積み重ねられた書物を両手に抱えた吉田という職員は、よろけながら廊下の角を曲がっていった。

「今の人、たまに話してるけど知り合いなのか？」

幸正が尋ねる。

「親父の部下の人で、昔から俺らの面倒見てくれたりするんだよ。」

「かつこ……いい……ですよね。」

「!？」

明日香が男性を褒める姿など見たことなかった幸正と学が驚く。

「まあ四十手前にしては、悪くないわね。」

京子の言葉の通り、四十歳前という年齢を考えれば、引き締まった体を維持しており、髪も豊かであった。

実際、図書館を訪れる一部の主婦層に高い人気を誇っていた。

「さあ、さつさと勉強しようぜ。」

先頭に行く幸正が和室の木目の引き戸を開ける。

「そうですね。一年分の内容ですから、ゆっくりしている余裕はありませんからね。」

室内には木目の美しい机が置かれ、窓辺には季節の花が活けてあった。

窓から眺める公園には、ジョギング中の主婦や散歩中の老人の姿がちらほらと見受けられた。

奥には、アメリカ合衆国軍北区基地の建物が並んでいる。

五人は靴を脱ぎ、畳に上がり、隅に積まれた座布団を並べた。適当に座り、勉強道具を取り出す。

この時の彼らは、まだ何も知らなかった。

自分達がこれから復習する歴史が嘘に塗り固められている事は、よく知っているし、それを甘んじて受け入れるしかないこともよく分かっていた。

ただ受け入れることを選択してきた自分達のすぐ傍で、奪われた自由と権利を取り戻すために戦っていることを彼らは、まだ知らなかったのだ。

そして、これから起こる事件は彼らに選択を迫ることになる。

「今日はいい天気だな。」

不意に口をついた大輔の言葉は、裏を返せば明日はどしゃぶりの雨かもしれないということを意味する。

それは変えようの無い運命であるが、彼らには選択できる未来があるのだ。

そして、今日がその選択の日だったただけのことだった。

奇しくも大輔や京子達が名前をもらったあの日から、ちょうど十五年目の事だった。

北区中央図書館、秘密の地下室。

何を隠そう、ここ北区中央図書館の職員は全員がレジスタンスの面々であった。

吉田は両手に抱えた書物を受け付け横に置くと、やや足早に職員事務所へと入っていく。

職員事務所の奥に設けられた蔵書保管庫のさらに奥、壁面には四つの本棚が設置されている。

右から二つ目の本棚の、上から六段目、右から十六冊目の書物を

押し込む。

本棚に偽装された隠し扉が開き、地下へと続く階段が姿を現す。階段を下るとそこには、最新鋭の機器やコンピュータが並ぶレジスタンスの作戦本部があった。

その奥には武器や弾薬がずらつと並び、物々しい雰囲気を放っていた。

「山本隊長、京子ちゃん達が来てますよ。」

「吉田ー、副館長って呼べって言うてるだろ。」

「すいませーん。」

二十七歳で自衛隊の秘密工作部隊の隊長を務めていた大和も、既に不惑を超えていた。

相変わらず筋骨隆々といった風貌であるが、頭部はやや薄くなってきたと本人も感じているようだ。

「吉田君、それで状況はどうかね？」

「はい。先の暴動に端を発した住民と合衆国軍との小競合いはまだ続いています。幸い大きなケガを負った者や、死者は出ていません。」

「いよいよ、この国が溜めに溜め込んだ膿が抑えきれなくなってきたという訳ですか。」

当時、秘密工作部隊の本部長を務めていた岩波は既に六十五歳になつていた。

頭髪は白くなり、眼鏡無しで細かい文字を読むことが出来なくなっていた。

しかしその鋭い眼光は、以前と変わらぬ将のそれであった。

「山本君、どう見ますか？」

「そうですね……このままいけば住民の不満は抑えきれなくなるでしょう。我々が動くとすれば、その爆発が起きた時ですかね。」

連合国の委任統治という名目の侵略は、この国の情勢を大きく変えた。

北海道や九州は既にほぼ外国と化したのは勿論、渡航にすらアメ

リア合衆国の許可が必要であった。

細菌の感染を恐れた若者の対人恐怖症や、それに伴う少子高齢化人口減少。

ただでさえ減少傾向の人口にも関わらず、アメリカ本国からの移民は後を絶たず、日本人の失業率は年々、増加傾向にあった。

警察権はアメリカに奪われ、立法や司法は独立を保っているものの、本質を見れば支配下に置かれていることは火の目を見るより明らかだった。

「うむ……私も同意権だ。決戦のときは近いという事だな。」

決戦……それは、この十五年レジスタンスが培ってきた戦力をもつてアメリカ合衆国軍を叩くことを意味していた。

単独では意味をなさないそれも、民衆の爆発と合わされば大きな打撃を与えることが出来る。

レジスタンスはその時を待っていた。

身分を偽装し、力を蓄え、ただ只管にその時を待っていた。

レジスタンスの面々は、来るべきその時に備え、再び作業に取り掛かる。

その顔は希望に満ちた戦士のそれそのものだった。

ただ……戦士たちは知らない。

安易な希望は絶望を生むことを……そして絶望は、案外すぐ傍に迫って来ている事を。

毒蛇の牙はもう戦士の喉下まで迫っていた。

大輔たちの勉強はすこぶる順調に進んでいた。

と云うのも大輔や幸正はさて置き、明日香や京子は優等生として教員からの評判も良い生徒である。

まして学ぶに至っては、学年首位を争う秀才である。

その三人、特に学の教え方は丁寧かつ迅速で、いかに大輔や幸正

が勉強に不得手であつても捲りざるをえないのだった。

「さて、一学期の内容も終えましたし、少し休憩にしましょうか。」
勉強を始めて一時間を少し過ぎた所で、一学期分に相当する内容を教授し終えるとは、教師が羨む才であつた。

「しかし、あんなに端折つて大丈夫なのか？」

「ええ。流れと要点さえ抑えておけば、後は大丈夫でしょう。復習テストというくらいですから、細かな所は出題されないと思いますよ。」

幸正が背伸びしながら尋ねた質問に、幸正は眼鏡を拭きながら答える。

「あんたらなんか教えて貰わなきゃ赤点間違いなしなんだから、黙つて勉強してなさいよ。」

「てめえ……あんたらつてのは、俺も含まれてんのか？」

京子のトゲのある物言いに大輔が突つかかる。

「そうよ。寧ろあんたがその筆頭じゃない。」

「馬鹿やるー。俺は一年次の最終評定平均、三だぞ。幸正と一緒にすんな。」

「馬鹿云え大輔……たかが小数点一の差程度で調子に乗るな。」

大輔の物言いに今度は、幸正が突つかかる。

「それ……十段階……評価。」

お世辞にも良いと云えない成績で張り合っている彼らを見かねて明日香が真実を告げる。

「!？」

「どうやら知らなかつたらしい。」

都立竹園高校では、最終評定のも五段階ではなく十段階評価を用いていた。

「分かつた？分かつたなら黙つて勉強してなさい。」

呆然としていた大輔と幸正に、京子がとどめの一言を言い放つた。

二人は返す言葉も無く、座布団の上で頭を抱えた。

「相変わらず、仲良いねえ。」

不意に木目の引き戸が開き、吉田が顔を覗かせた。足を横に崩していた明日香が、急に正座になる。

「あっ、いいからそのまま楽にしてよ。」

器用に足で戸を開いて、入ってきた吉田は両手に缶ジュースを抱えていた。

「これ、俺から差し入れ。」

靴は脱がずに畳に腰掛け、ジュースを机に置く。

「吉田さんサンキュー。」

「おお。」

京子は親しげに、幸正は歳相応に、学は丁寧に、明日香は恥ずかしそうに礼を述べた。

「いいっていいって。山本たっ……副館長にはいつもお世話になってるからさ。」

吉田は途中、云い間違えそうになる。

十五年経つても、秘密工作部隊時代の癖が抜け切らないようだ。

「まーたお世辞云って。いつもこき使われてるんじゃないの？」

「ははっ、まあね。」

「だーれーが、こき使ってるってー？」

「げっ!？」

いつの間にか吉田の背後には、大和が鬼の形相で立っていた。

学は音も無くそこにいた大和に驚きを覚えたが、口を噤んだ。

「吉田は後で説教だな。」

「そんなー。」

まるで仲の良い兄弟のような、おっさん達の奇妙なやり取りに和室に笑顔が生まれる。

「大輔も京子もちゃんと勉強しろよ。」

「はい。」

大輔と京子は口を揃えて返事をする。

「じゃあ俺は、まだ仕事があるから。今日は遅くなるから夕飯は二人で済ませてくれ。それから、吉田もいつまでもさぼってんじゃないね

「ぞ。」

「はい。」

そう云って大和は和室を後にした。

「おー、怖い怖い。」

吉田は大和が居なくなつたのを確認すると、ペロツと舌を出しておどけて見せた。

「それじゃあ、俺もお暇するよ。皆、勉強頑張つてね。」

吉田もヒラヒラと手を振って和室を後にした。

「それでは、僕達もそろそろ勉強再開しましょうか。」

学の一言で、復習テストに向けた勉強が再開した。

幸い次の和室利用者はいないようで、図書館の閉館時間である午後五時まで二時間以上も残されていた。

学の教え方とペースなら悠々と一年次の内容をカバーできる時間だろう。

ただし、それは何も無ければの話であった。

事件というものは、何時どこでも起こりえる。

それが例え、仮初の平穩を望み、それを享受してきた者であつてもだ。

幸か不幸か人間は運命に抗えない。

天より石を落とす者の意思と、地に佇む者の意思は必ずしも一致しない。

もし彼らが、その石を避けられないのだとすれば、彼らは選択しなければならぬ。

石を打ち落とすか、石を避けるか。

ただし前者を選ぶことは、今まで享受してきた平穩を捨て去り立ち向かうことを意味する。

そして二度とは戻れない戦いの日々を身をつづめることになるだろう。

いずれにせよ、選択の時はすぐ傍まで迫っていた。

アメリカ合衆国軍、統合指令本部。

薄暗い一室は、一組の机とその上に置かれた電気スタンドだけが設置された簡素な部屋になっていた。

椅子にはブロンドヘアをオールバックにしたアメリカ人が腰掛け
ていた。

机の前には、軍服を来た将校が立っている。

「ええ、父上、ついに彼らを見つけました。」

冷たい声が室内に響く。

『そうか、やはり私の睨んだ通りだったようだね。飼いだに手を噛
まれたとあっては、私はとんだ笑いものだよ。』

電話の相手は、ビリー・ワシントン。

十五年前、駐日アメリカ合衆国大使であった彼は今やアメリカ合
衆国大統領にまで上り詰めていた。

「ご心配には及びませんよ。それであなたはどうなっています？」

『ああ、医学博士の残した暗号化データの解析も問題なく進んでい
る。最近の適合者を探すのには苦労したが、ようやく最後の一人が
見つかったよ。』

「さすが父上。私の方は、早急に殲滅早速作戦を開始しましょう。」

『うむ。後は任せるぞ。愛しのジュニア。』

「ええ、鼠は生かしておけませんからね。天はアメリカに……父上
に勝てと仰っていますよ。」

受話器を置いた、顔は良からぬ事を考えているビリーそのものだ
った。

彼の名は、オリバー・ワシントン。

父の後を次ぐ形で、アメリカ合衆国軍日本委任統治司令官の職に
就いていた。

(さあ、狩りの始まりだ。)

「大統領の許可が下りた。襲撃地点は北区中央図書館。図書館閉館

後の午後五時十五分を待つて、攻撃を開始だ。」

「イエッサー。」

午後の日差しがカーテンの隙間から漏れ、机の上を照らす。机の上には、大和や吉田、岩波らの写真が置かれていた。

ついに毒蛇は狙いを定めた。

ついに天から石は投げられた。

毒蛇はレジスタンスの首に狙いを定め、天は彼らに選択を迫る。

事件は起こるべくして起こる。

十五年のときを経て、今日この日より歴史は大きく動き出す。

賽は投げられたのだった。

予兆（後書き）

日常と陰謀が少しずつ交差してきました。
戦火は目前です。

主人公達の活躍はもう少し先になります。

勃発（前書き）

作者のおかむと申します。

以下の点に注意して読んで頂ければ幸いです。

・初投稿作品で、誤字・脱字・言葉遣い等におかしな点があるやもしれません。

指摘していただければ嬉しいです。

・SFを謳っていますが、そこまで科学的な知識に富んでいる訳ではないので、かなり拡大解釈等がありますのでご了承ください。

・この物語はフィクションなので、作中に登場する単語・場所・名称等は全て架空のもので、実在する名称と同様の表記でも一切の関連性はございませんので注意してください。

それでは作品のほうお楽しみいただければ幸いです。

勃発

西日が差し込み、手元を照らす。

北区中央図書館の和室で行われている、明日に控えた歴史の復習テストの勉強もいよいよ大詰めを迎えていた。

「そして、アメリカ合衆国による自衛隊攻撃が始まったわけですね、それから……」

「そこはもういいよ。」

「えっ!?!」

学の解説に大輔がやや語気を強めて口を挟む。

幼馴染である京子や明日香は、その発言の意図を理解していたが、幸正と学は腑に落ちない顔をしている。

「あんたいい加減にしたら?自分では何もしくせに……かつこ悪いと思わないの?」

「くっ……」

「京子……ちゃん。」

京子の発言で幸正と学はさらに、話が分からなくなってしまったようだ。

「おいおい、いきなりどうしたってんだよ?」

幸正が堪らず、尋ねる。

「何でもない。」

「何でもないってことは、ねーだろ。」

大輔は答えなかった。

「別に隠すこと無いでしょ。私たちがお父さんと本当の親子じゃない事は、前に話した通り。でもね、私達は本当は孤児院から引き取られたんじゃないの……。私達の本当の親は自衛官で、アメリカに殺されたらしいの。」

「!?!」

「それで、お父さんが引き取ってくれたらしいんだけど……大輔は、

今でもアメリカを許せないのよ。」

十五年前の連合国による攻撃は、ほぼ全ての自衛官が死亡するという結果を生んだ。

そして多くの家族を失った遺児などが社会問題になったのだ。

大和は、便宜的に大輔達にそう教えてきた。

それは出来るだけ自然、且つ連合国と呼ばれる侵略者達の本当の姿を忘れさせないための嘘であった。

「そのくせ、自分は今日の今日まで何もしてこなかった。一人だけ傷ついたような顔して、情けないと思わないの？」

「京子……ちゃん……もうやめて。」

明日香が泣きそうな顔で訴える。

京子もばつが悪くなったようで、それ以上続けることはしなかった。

重苦しい雰囲気や和室を包み込む。

「違うんだ……そうじゃないんだ。」

この雰囲気を生み出してしまった大輔自身が口を開く。

「俺は……悔しいんだ。無力な自分も、何もしてこなかった自分も、現状に甘んじている自分も……何もかもが悔しいんだ。」

大輔は上手く言葉に出来なかった。

ただ過ぎていく日々を憂いつつも、無力な自分。

それは多くの人間が抱いている感情でもあった。

ついこの間までここは自分の国だったのに、気がついたらありとあらゆる自由と権利が奪われている。

しかし自分達の力ではどうすることも出来ない現状をこの十五年の間、受け入れてきた。

そういうもどかしさは、大輔だけのものではなかった。

「俺も……大輔の云いたい事分かるな。俺んち、居酒屋だからさ、時々手伝ってるんだけど、アメリカの連中がたまに来るんだよ。あいつらうちの常連がいるのにお構いなしに、騒ぎたてて。でも親父もお袋も常連のおっちゃん達も強く云えなくて。」

街中でよく見かける光景であつた。

実際、アメリカ兵の基地外での行動は限度を超えたものがあつた。裏通りでは婦女暴行や強請りなども横行していたが、警察権のない国民は日々、苦汁を舐めてきた。

「僕も似たような経験をしたことがあります。」

「でも……だからつて、今あんたがやつてる事が皆に迷惑かけてんの分かんないの？」

幼少より寝食を共にし、兄弟同然に育つてきた京子は大輔の気持ちが届きにくいほど理解できた。

だからこそ京子はあえて語気を強めて大輔に迫る。

「分かつてる。俺が悪かつた……。」

その場に居た全員が少し安堵する。

しかし空気を完全に変えるまでにはいたらなかつた。

破りようのない沈黙が続く。

彼らに架せられた現状という名の十字架はあまりにも重い。

『間も無く時刻は午後五時を迎えます。当館は午後五時をもって閉館となっております。』

沈黙を破つたのは、閉館のアナウンスだつた。

「今日はここまでにして帰りましょうか。」

学の一声で片づけを始める。

やり場の無いもどかしい感情が、室内を包む。

それでも彼らは、憂いている猶予など持ち合わせてはいない。

選択の瞬間は、もう手の届く位置まで迫っていた。

彼らはその時を待つ以外にもう道は無いのだから。

図書館を後にした大輔たち一行は、もやもやした気持ちのまま帰路についていた。

当然のごとく会話は無い。

誰一人として自転車に跨る者は無く、足取りは重い。夕焼けに染まる空は、橙色に世界を染め上げていた。

それは大輔が不意に空を見上げたのと時を同じくして、やってきた。

ズドン。

「!？」

「何!？」

爆発音に似た鈍い音が空に響き、大地が揺れる感触がする。だが地震ではない。

ズドン　ズドン。

さらに間隔を置いて、もう二度。

「公園のほうからだ。」

最初に気づいたのは、幸正だった。

「アメリカ軍の軍事演習とかじゃないの？」

「それはあり得ませんよ。日本政府との取り決めで、住民に対する事前の通告があった場合を除き、軍事演習は午後三時までと決められています。」

京子の疑問を学ぶが否定する。

「あるとすれば……なんらかの非常事態です。」

学言葉に真つ先に反応したのは大輔だった。

大輔が感じたのは、悪寒という表現が最も近い。

それもただの悪寒ではなく、脳に直接訴えかけるような何かであった。

「わりい。俺は様子を見てくる。先に帰っててくれ。」

と云い終える前に、大輔は自転車を反転させると、来た道に戻っていった。

「ちよつ、大輔!？」

「つたく……あの野郎。」

幸正が素早く反応し、先に行く大輔を追う。

京子たち三人もそれに追従する。

ついに選択の時は彼らの眼前に訪れた。
全ての始まった研究施設捜索から十五年。
奇しくも事件は、あの日からちょうど十五年目の今日に起こった。

「緊急事態です！！ミサイル弾三発が、図書館南西より図書館脇へ着弾！！外壁の一部が破損！！」

地下レジスタンスの作戦司令室に、女性の怒声が響く。

「慌てるな。これは陽動だ。敵は確認できるか？」

岩波の冷静な指揮が、レジスタンスの面々の耳に届く。

「南西の監視カメラに敵影を確認。歩兵、五十……アメリカ軍の制服です。」

「ついにばれたか。しかし、敵五十か……いけるか、山本君？」

「キツイですね。こっちは大部分が代々木で、いま動けるのは二十五人だけです。勝機があるとすれば、公園内でのゲリラ戦かと……。」

レジスタンスは万が一、その存在が明らかになってしまった場合に備え、公園内に秘密の地下通路や遊具に偽装したトラップを仕掛けていた。

しかしそれはあくまで、万が一の場合であって、本来は民衆の暴動に乗じて作戦を実行するための組織である。

勝機の薄さは、誰が見ても明らかであった。

「うむ。仕方ない。このままこちらが沈黙を保てば、あちらは直接攻撃も厭わないだろう。そうしないのは、図書館を攻撃することが住民感情を刺激することをあちらも理解しているからだ。」

岩波の読みは、完全に的を射ていた。

アメリカ軍としては、ゲリラ戦までは想定していなかったもの、なるべく住民感情を煽らない作戦として、公園内での白兵戦を望んでいた。

「これよりオペレーション作業員を除く戦闘員は、地下通路を通じて公園へ拡散。アメリカ兵を各個撃破せよ。」

「うおおおおおおおお。」

地下室にレジスタンスの面々の雄叫びが木霊す。

各自が装備を整え、地下通路を駆け抜けていく。

「山本隊長、僕らも行きましょう。」

「ふっ……隊長か。今だけは、お咎めなしだ。」

吉田の呼びかけに、兵装を整えていた大和は応える。

(ついにこの時がきてしまった。)

覚悟を決めた大和の顔は、十五年前のそれとなんら変わりなかった。

歴戦の勇士、常に戦火に身を置いてきた戦士のそれだった。

「いくぞ、吉田ー!!」

「はい!!」

大和に続き、吉田も駆け抜けていく。

いよいよ戦いの時が訪れた。

大和達にとっては、それは十五年前から既に始まっていたのかもしれない。

あとは、どちらかが勝つか負けるかだけだった。

地下通路をブーツの駆ける音が、木霊していた。

大輔は北区中央図書館入り口へと続く坂道の頂点に辿り着いていた。

眼下の公園には煙が立ち上り、乾いた発砲声が聞こえる。

(なんだこれは……。現実なのか……。)

息を切らして、坂道を上ってきた幸正が追いつく。

「おい……。だいす……。け?」

幸正も事態の異常さに気付く。

眼下に広がる光景が自分達の日常とは余りにもかけ離れている。
「これって……どうなってるんだ……」
幸正の口から自然にこぼれ出た言葉。

(親父……)

大輔の悪寒は、育ての親である大和の身を案じるものに変わる。
そして考えるより早く体が動く。

自転車を投げ捨て、大輔は坂道を全速力で下っていく。

「おい！！大輔！！」

再び前へと走り出した大輔の背に呼びかけるが聞こえてはいない
ようだった。

幸正は大輔が放り投げた自転車を起こして、スタンドを立てた。
そこへ息も絶え絶えになった後続の三人が追いつく。

三人も事態の異常さを認識する。

「はあ……はあ……だい……すけ……は？」

幸正は前方を走る大輔の背を指差す。

「あの……バカ。」

「京子ちゃん！！」

京子は乗ってきた自転車を放り出して、大輔の背を追うように走り出した。

明日香の呼びかけにも気付かない。

「全く、あの兄弟には振り回されっぱなしだ。」

幸正は事態に一抹の不安を覚えつつ、同じような行動を見せる二人の姿に笑みさえ込み上げてくるのだった。

「さあ俺らも行こうぜ。」

「行くってあそこへですか？」

学の云うあそことは、煙の立ち上る方を意味していた。

「そうだよ。放ってはおけないだろ。」

そう云ってニヤリと笑う幸正の顔が少し引きつっていた事に本人は気付いていない。

ただ明日香も学もその事には触れない。

幸正にはどこかそうさせる心強さがあつたからだ。
先に行く二人を三人も追い始めた。

公園内で繰り広げられるゲリラ戦は、激化の様相を呈していた。
ダダダダダダダダダダ。
ダダダダダダダダダダ。

自動小銃の機械的な発砲音が響く。

「はあ……はあ……こちら吉田、前方クリア。」

「こちらも二人仕留めた。こちらの人数分かるか？」

戦闘が始まって数分はレジスタンスが優勢であった。

地の利とトラップを活かした先制奇襲攻撃で徐々に敵兵を仕留めていった。

しかし戦闘が長期化するにつれ、数と装備に勝るアメリカ兵の前にレジスタンスの面々は、その数を減らした。

「おそらく悲惨でしょう。さっきから味方とまるで連絡が取れませ
ん。」

「最悪、俺たちだけという可能性もあるな。」

実際には、残り数人が身を潜め機を窺っていた。

一方のアメリカ軍の方も大きく数を減らし、厳しい戦闘を強いら
れていた。

負傷兵を除けば、その戦力はほぼ等数と云つていい状況であった。

「隊長、アメリカ兵が動きます。数は……六……なに!？」

「どうした？」

「全員が、公園を出て図書館前広場の方へ向かっています。」

「まさか……殲滅した気であるのか？」

答えは否であった。

しかしそれを現状から察知することは不可能であった。

「ちつ。本部を襲わせる訳にはいかない。行くしかないな。」

大和の懸念は、ここで本部を急襲されるという最悪の事態を想定していた。

もしアメリカが強攻策として図書館自体を襲撃した場合、本部に残る戦力は少ない。

しかも多くの兵装や機器を喪失するという結果を招く。

「了解。後を追いましょ。」

「ああ。途中で合流し、背後から強襲するぞ。」

大和達は、アメリカ兵が居なくなったのを確認すると慎重に公園前広場のほうへ向かった。

それに気付いた潜伏していた味方も後に続く。

戦闘は佳境へと突入していた。

大和達が図書館前広場に着き、その光景に愕然とした。

「まさか……完成していたのか。」

大和たちが見た物……それは『半自動制御強化装甲』、英語名の頭文字を取って サクサ *Sacsa* と呼ばれていた。

技術体系は以前より完成していたものの、実際に戦闘で使用された事例は一度も無かった。

サクサは名の通り、装甲自体に人工知能を搭載し、最適な駆動を選択する補助装甲である。

その最たる特徴は、人間特有の感情のぶれや視覚認識の誤差が無いこと。

簡単に言えば、人間を意思の無い殺人兵器へと変えるという事である。

しかし、確認できるのは一体だけであった。

「隊長、どうします?」

「サクサは見たところ一体だけのようだ。こちらは……五人か。やるしかあるまい。」

追い付いてきた味方の顔を見渡し、大和は覚悟を決めるよう促す。
「俺がサクサをひき付ける。その隙にお前らは、残りの兵を殲滅し
る。」

大和達は五人、対してアメリカ兵はサクサ装備兵を含め七人。
圧倒的不利な状況に変わりはなかった。

「よし、行くぞ。」

大和がアメリカ兵達の正面を突く。

「うおおおおおおおお。」
ダダダダダダダダダ。

自動小銃の音が響き、サクサ前面に構えていたアメリカ兵に命中
する。

そのままアメリカ兵は地面に突っ伏す。

ダダダダダダダダダ。

大和はそのまま自動小銃をサクサに向けて撃ち続ける。

しかし硬い装甲を破るには至らない。

アメリカ兵も自動小銃を構え応戦する。

サクサが右腕部に装備された小型ロケット弾を発射した。

シューと煙を吐く音と共に大和に向かって一直線に向かってくる。

大和はそれを避けるべく、右前方向に方向転換し、木陰に飛び込
んだ。

ロケット弾は大和が飛んだ地点に着弾し、土煙が上がる。

尚もアメリカ兵の放つ銃弾の雨あられば止まない。

サクサは鈍い機械音を放ちながら、大和のほうへと歩を進める。

その機を待っていた吉田たちが物陰からアメリカ兵を急襲する。

「うおおおおおおおお！！」

ダダダダダダダダダ。

遅れてアメリカ兵も発砲先を大和のいる木陰ではなく、四方より
遅い来るレジスタンスの面々へ向けた。

ダダダダダダダダダ。

お互いの放つ小銃の音が交差する。

吉田らの奇襲は成功した。

アメリカ兵は次々と地面に倒れていく。

しかしサクサはその動きを止めない。

左腕に装備された自動小銃を放ちながら、大和に迫る。

途中で弾薬が尽きたても尚、右腕部に収納されたブレードを露出させ、尚も大和に迫る。

大和もそれに気付き応戦するが、機械の駆動に追いつけない。
「ぐっ!？」

大きな音と共にサクサの強烈な打撃が、大和の腹部に命中する。
アームが大和の胸倉を掴みあげる。

(しまった。狙いは最初から俺か……。)
薄れ行く意識の中大和は思考する。

大和の直感には正解であった。

アメリカ軍の狙いは最初から、レジスタンスの中核を担う山本大和であった。

自衛隊秘密工作部隊の隊長時代、数々の極秘任務に当たっていた大和の武勲は、敵である諸国からも恐れられるほどであった。

その大和を叩くことは、ここからの情勢に大きく影響する。

「観念しろ。お前達もだ。武器を捨て膝を着き、両手を頭の後ろで
組め。」

機械化された日本語がスピーカーから響く。

サクサは大和の首にブレードを突きつけ、大和を盾にするように抱えると吉田達に降伏を迫った。

それは事実上の戦闘終了を宣言するものだった。

残弾数も残り少なくなっていた吉田達に選択の余地はなかった。

このまま大和を犠牲にサクサを攻撃することは容易だが、それでサクサを破壊できる可能性は限りなく薄かった。

「くそっ!！」

吉田は小銃を地面に叩きつけ、膝を突いた。

他の面々も同じようにするしかなかった。

サクサの搭乗兵は吉田達の様子を確認し、大和を連れ去るべく動きだそうとした。

すぐ目前まで迫っていた蜂起を前にして、レジスタンスはその芽の一つを潰されようとしていた。

しかも数少ない芽の中でも、最も優秀な芽を。

しかしそれは突如として訪れる。

強く猛り、怒り狂う風の到来であった。

覚醒

ギリシア神話におけるアネモイしかり、北欧神話におけるスレイブニルしかり。

或いは東アジアにおける風神。

物語の中において、風に纏わる神々は、時としてその力をもって人間達の前に立ちはだかる事がある。

『物語における教訓は、古今東西を見ても、総じてただ一つである。神々を怒らせてはならない。』

そして今、その場にいた全ての者たちが、それを身をもって感じることになる。

「おや……じじ？」

異変に最初に気づいたのは、吉田であった。

図書館脇から公園へと伸びる階段の頂点に大輔は立っていた。

「大輔!？」

吉田の呼びかけに大輔の反応は無い。

(くそつ。周りが見えなくなつてやがる。)

事実、大輔の視点は大和、あるいはそれを抱きかかえるサクサを捉えていた。

大輔の脳内では、動かない大和を抱えているサクサという今まで見たことの無い光景に対して、強い疑念と不安が交差していた。

そして、はつきりと育ての親である大和の死を意識する。

それは同時に強い怒りと焦りを生む。

瞬時に今まで過ごしてきた十五年という月日の思い出が、脳内を駆け巡る。

それらの思考は本人の意識とは関係なしに、大輔を前へと歩を進める。

「大輔止まれ!!!」

吉田は声を張り上げて大輔に制止することを呼びかける。

しかしその声すら大輔の耳には届かない。

それどころか大輔の歩む速度は、徐々に速くなっていく。階段を下り終えた大輔は、一直線に大和のほうへと向かっていく。彼は今、その身に宿る怒りに完全に心と体を委ねていた。

「大輔！！こつちに来るんじゃない！！」

尚も呼びかける吉田の声は、空しく公園に響く。

「……大輔！！」

その声は、大輔の後を追いかけてきた京子の物だった。

先ほどまで大輔が立っていた階段上部に姿を現した京子も事態の異常さに気付く。

（なにこれ！？どうなってるの？）

京子の脳内で、現状の理解を促す思考と父親の姿への動揺が交差し、激しく混乱する。

大輔はその速度をさらに速め、大和へ向かい走っている。

（親父！！親父！！親父！！）

大輔の脳内では、異常な数の電気信号がやり取りされていた。そして彼は自分自身に問いかける。

（俺は……どうすればいい？）

『助けたいんだろ？』

心の中にもう一人の自分が出現し、その問いに答える。

（助けたい……親父を助けたい。）

大輔は今その思いを怒りと云うベクトルに乗せ、歩を進めていた。『なら助けようぜ。』

（だけど……俺にはその力が……）

大輔が憂いている自らの無力さがその肩に重くのしかかる。

彼は今、それを怒りという思考によってカバーすることでその身を前に進めていた。

言い換えれば、事実彼に策は無い。

冷静に状況を判断する余裕も無い。

その歩みは所詮、ただの歩みに過ぎないのが現状であった。

『力なら持つてるじゃねーか。』

(!?)

内なる自分から発せられた言葉に驚く。

『しょうがねーな。今だけ、力を貸してやるよ。』

大輔は困惑していた。

自らの心のうちに巢食う何かの正体が理解できなかった。

もう一人の自分は、自分であって自分ではない別の何かだった。

『強く想え。強く願え。風よ、強く吹けと。』

大輔はその言葉の真意が理解できない。

ただ一つ云える事は、今目の前にいる自分の姿をした何かの云っている事にしたがうべきだという事。

無論、根拠などは無く直感にも似た感覚であった。

(風よ、吹け!! 強く、吹け!!)

思考は一瞬だった。

「親父を……はなせええええええええええええ!!!!」

怒り、猛り狂う風は、強く吹いた。

全ての始まりを告げる、一迅の風が吹いた瞬間であった。

(何が起きた?)

事に最初に気付いたのは、吉田であった。

「大輔!!」

大声を発し迫りくる大輔を彼は身を投げ出して止めようとする。

彼の両の腕は確かに大輔を捕らえる。

しかしそれは一瞬にして彼の両腕の中から消え去る。

勢いあまつて吉田はその場に倒れこむ。

(……!!? 掴みそこなつたか!?)

「大輔!?!」

その様子をやや離れた階段上部より見ていた京子が、その光景に

驚く。

そして自らの視覚の異常を疑い、二度、目を瞬く。しかしその行為は、その光景が現実であることを理解する確認にしかならなかった。

確かに吉田は大輔を捕らえるが、その一瞬後にその腕の中から消え去った。

「!？」

サクサの搭乗兵は背にした吉田らの様子の変化に気付く。

大声で叫びをあげる吉田らに違和感を覚え、視点を後ろに切り替えるべく反転を試みる。

しかしその動きは為されない。

それは、彼らが三者三様の異常に気付くのとほぼ同時であった。風が吹く。

吉田の頬をなでる様に過ぎた風は、急激にその風速を速め、一定の方向性を保ったまま公園の歩道部分を吹き抜ける。

それは突風と云う表現では足りない。

風速にすれば、竜巻のそれを遙かに上回る風であった。

そして風は総重量三百キログラムを越すサクサを軽がると吹き飛ばす。

大和は衝撃で地面へと振り落とされる。

サクサはそのまま五十メートルほど離れた位置にある樹木へと叩きつけられる。

どんつ。

鈍い音がし、サクサはその機能を停止する。

風が止む。

まさに一瞬の出来事であった。

やや離れていた位置からそれを傍観することになった京子は、その違和感に気付く。

(大輔？大輔は?)

やり場の無い不安が胸を過ぎり、その身を動かす。

(とにかく探さなくちゃ。)

焦りからくる思考が京子を突き動かす。

(どう……なっている?)

吉田は一瞬の出来事に戸惑いを隠せない。

何れにせよ吉田達、レジスタンスの面々にとって状況が好転した事には、違いなかった。

(今は、まず山本隊長を……。)

吉田は考えうる中で最善と思われる選択肢を選び、大和の方へと動き出す。

同時に動きを開始した彼らは、未だ理解できぬ事態の不可解さに異様な恐怖感を感じていた。

しかしそれでも今出来る事をすべく、彼らは前へと歩む。

何れにせよ云える事は、レジスタンスが迎えた危機は突破されたという事である。

そしてその一翼を大輔が担ったという事が、吉田には直感で理解出来たのであった。

ドーンという衝撃音と共に交信が途絶える。

「どうした？何があった？」

アメリカ合衆国、日本委任統治統合指令本部の一室がざわつく。

「おい！！応答しろ！！」

逐一、レジスタンスとの戦況を報告していたサクサ搭乗兵から帰還の報告を受けた直後、状況が一変した。

つい数分前に山本大和を捕らえたという報告を受けたビリーは、満足げな表情を浮かべていた。

しかし今のオリバーにその影は無く、その顔は困惑に満ちていた。

「オペレーター、状況を報告しろ。」

「突如サクサからの交信が途絶えました。異変を知らせる報告すら

無かったことから、おそらく反応する隙すら与えない奇襲による攻撃があったものかと。」

「反応する隙すら与えない奇襲だと？」

「はい。確認できる全ての敵戦闘員を降伏させたという報告がある事から、おそらくこの局面まで隠れていた戦闘員がいたということかと。」

（まさか……次々と味方がやられている状況で、ここまで隠れ潜んでいただと!?!）

オペレーターは報告は憶測の範疇を出ないものであった。

そしてその憶測は事実と異なっていたが、状況を確認することの出来ないオリバーはそれを信じざるをえなかった。

そしてその事は、明確な敗北を意味していた事は明らかであった。（くっ……奴らを甘く見すぎていたか。まさかサクサを数秒で戦闘不能にする戦闘員がいるとは……。それもこの状況をまるで読んでいたかの如く突如として現れた。これは、我々としても気を抜けない戦いになるということか。）

オリバーの憶測はさらに大きな疑念を生んでいた。

サクサを数秒のうちに戦闘不能にした戦闘員など、米国中探しても存在しない。

その事を踏まえこれからの作戦を考える場合、さらなる戦力の増強やサクサの導入が必要になるということである。

（これは、いよいよあれの開発を急がねばなるまいな。）

「ともかく、遺体や戦闘の跡が市民に確認されれば、大きな暴動になりかねない。早急に回収班と整備班を送れ。」

「はい。」

このような状況にも関わらずオリバーは冷静な判断を行う。

どうやら切れ者っぷりは父親にも負けず劣らずのようである。

命令を受けたオペレーターは、早急に回収班と整備班の手配を行う。

オリバーの云う通り、公園の惨劇が表に出るような事があれば大

きな暴動が起こりかねない。

朝までに公園の整備と兵員の回収を行い、出来る限りの景観復元が必要であった。

(しかし……また父上に怒られてしまうな。)

オリバーはそんな事を考えながら、父親であるビリーへ連絡すべく自室へと向かった。

(おいおい……こいつはどうなってやがる!?)

図書館前に到着した幸正達は眼下に広がる光景に言葉を失う。

公園

「京子……ちゃん」

最初に動き出したのは、意外にも明日香であった。

大輔が大和の身を案じてそうしたように、京子が大輔の身を案じてそうしたように明日香も階段を下る。

明日香の動きを見て幸正と学も動き出す。

彼らの心中は不安と恐怖が入り混じった複雑な思いに満ちていた。しかしながら動揺する心に鞭を打って彼らは前に進んだ。

吉田の方では早々と大和を救出することに成功した。

相変わらず意識は無いものの、幸い大きな怪我は無い。

「山本隊長!! 起きて下さい!! 隊長!!」

険しい表情をした大和がそう長い時間を要さずに目を覚ます。

「吉……田……」

「隊長!! 良かった。もう駄目かと思いましたがよ。」

半泣きになった吉田が、大和を力一杯抱きしめる。

「つい……おい……おいつ!! いてーよ!!」

「えっ? ああすいません。」

どうやら大和の傷に響く程思い切り抱きしてめいたようだ。

大和はゆっくりと上体を起こし、周囲を見渡して状況を確認する。

「吉田……これはどういうことだ？」

大和が目にした光景は予想だにしないものであった。

大和の記憶はサクサに痛恨の一撃を喰らう直前で途切れている。

そして目を覚ました大和が見たものは、自らを捕らえていたサクサの変わり果てた姿であった。

「分かりません……。大輔が急に現れて……現れたと思ったら消えて……」

「消えた!？」

「はい……。そしたら急に猛烈な風がサクサに吹きつけて……」

「風……?それより大輔は？」

大和は吉田の言葉の意味がいまいち理解できなかった。

しかし今はそれよりも大輔の無事を確認することが先決であった。

「大輔ならあそこに。」

吉田が指差した方向には、京子がいた。

地べたに座り込んだ京子の膝元には、大輔が横たわっていた。

「大輔……」

大和は大輔の無事を確認すると一先ず安堵した。

消えたという吉田の言葉を聞いて大和が最初に連想したのは、培養装置から大輔を出して以降、今日まで発現していなかった四大元素細菌の再発現であった。

そして改めて周囲の状況を確認して、その被害の甚大さに胸が痛む。

多くの同胞を失い、犠牲を払ってレジスタンスを守ったと思っていた。

だがそれは間違いで、最初から自分がターゲットであった事に気付けなかった事が腹立たしかった。

何より、それが原因で多くの仲間を失ってしまった自分自身の無力さが悔しかった。

そして話に聞く、戦況を大きく変えた大輔の行動とそれに伴って起きた現象、それが何なのか分からない不安が胸をよぎる。

それでも大和は噛み締めていた。
今生きているということ。

「大輔！！起きてよ！！」

京子はサクサの近くに横たわっていた大輔を見つけると、駆け寄って抱き起こした。

だが、反応は無い。

口元に耳を近付けて確認する。

（息も鼓動もある。良かった！！生きてる。）

それでも自然と涙がこみ上げてくる。

今、自分の目の前に横たわる大輔を見て芽生えた不安と生存を確認して芽生えた安堵。

相反する二つの感情が混じりあい、複雑な心境を生む。

京子は誰よりも客観的視点から全てを見ていた。

大和のほうへと賭けていく大輔を捕らえようとした吉田も。

それに気付き反転しようとしたサクサの動きも。

手を伸ばすと同時に消えた大輔も。

そう……京子の目から見ても大輔は完全に消えたように見えた。

まるで初めからそこにいなかったかのように姿かたちが消えうせていた。

そして吹き抜ける一迅の風もその体で感じていた。

それでも京子にとって今、最も大切な事は目の前の大輔の無事であった。

（良かった……。本当に良かった。）

涙をこぼしながらそう心の中で呟いた京子は、思う。

今までダメな弟のように思ってきた大輔のかけがえの無さを。

居るのが当たり前前の存在が居なくなるかもしれないと感じた時の悲しさを。

京子は強く感じていた。

大輔が誰よりも大切な人間であることを。

かくして大輔の引き起こした現象により、北区中央図書館レジスタンスは夕刻の襲撃に耐えた。

しかし彼らに与えられた傷はあまりにも深く、広がった。

彼らは知らなければならぬ。

こらから待ち受ける強大な敵との戦いを。

そしてその上で受け止めなければならぬ。

その背中に背負わされた十字架を重みに。

兎にも角にも、こうしてレジスタンスの予期せぬ初陣は勝利に終わった。

それは冗談にも勝利とは云い難い物であったが、彼らには美酒など必要ではない。

彼らに必要なのは、祖国を守るための戦いにおける血であった。

そして図らずも大輔もその血を捧げる事となる。

それはまだ誰も知りえぬ事であった。

もう戦いの日々は始まってしまった。

あとは彼ら自身が前に進むだけ。

ついに北区中央図書館レジスタンスの歩みは始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1292y/>

進め！北区中央図書館レジスタンス

2011年11月14日03時33分発行